

平成31年4月1日

防衛大学校同窓会機関紙

小原台だより



平成30年度卒業式

Vol.26
電子版第4号

CONTENTS

■ 防衛大学校同窓会長からのご挨拶	3
■ 学校長に聞く	6
■ 会長ルーム・活動録	
平成30年度第3学年部隊実習激励	9
防衛大学校平成29年度開校記念祭等参加	12
■ 防衛大学校関連	
副校長に聞く	15
幹事に聞く	21
防衛大学校第66期生会設立総会出席	24
同窓生著作等の寄贈	27
防衛学特論研究レポート発表会	29
断郊・持続走競技会激励について	31
■ 同窓生は今	
第62期生に聞く	34
今人生、男盛り（第24期生）	45
■ 活動報告	
第6期ホーム・カミングデー2（HCD2）	56
第42期ホーム・ビジット・デー（HVD）	60
平成29年度防衛大学校同窓会代議員会等（実施報告）	68
第20期ホーム・カミングデー（HCD）	71
保安大学校記念碑建立行事	83
■ 連絡事項	
平成29年度防衛大学校同窓会決算書	84
平成30年度期生会長・代議員名簿	87
平成31年度同窓会本部・支部役員名簿	89
平成30年度事務局員名簿	92
平成30年度小原台事務局員名簿	93
■ 編集後記	94

■防衛大学校同窓会長からのご挨拶



防衛大学校同窓会の皆様、こんにちは。私は、本年4月、杉本前会長からバトンタッチを受け、防大同窓会会長を拝命しました岩崎 茂(第19期、航空要員、航空工学、グライダー部、岩手県出身)です。若輩であり僭越ですが防大同窓会の為に尽力する所存です。宜しくお願い申し上げます。

さて、防大では、本年3月には第63期生が卒業し、4月には第67期生が入校しました。私が防大に入校したのは、1971年(昭和46年)です。当時、防大には日清・日露戦争の事を時々言われる旧軍出身の指導官がおられました。日露戦争は既に67年も前であり、私達にとって「かなり前の戦争」との思いがありました。多分、今の新生入生にとっては「先の大戦」とはどの戦争の事か分からず、遙か遠くの事と感じている事でしょうし、防大創設もかなり前の事であり、遠い昔と感じているのではと思います。我が防衛大学校も旧軍と並ぶような歴史を刻んできております。

本年の卒業式には、既に定着しておりますホーム・カミング・デー(HCD)に第20期生がご招待され、卒業式で昨年同様、自衛隊の最高指揮官である安倍総理から、第63期生には卒業のお祝いと幹部自衛官としての激励、そして第20期生には永年の自衛隊での勤務に対する労いのお言葉を頂いております。

また、入校式には、入校から60年経過した卒業生をご招待するホーム・カミング・デー2(HCD2:2016年開始)が行われ、第7期の方々が奥様やご家族とともに招待されました。そして入校式の一連の行事終了後、横須賀市で第7期生同窓会懇親会が盛大に行われました。私も家内とともにご招待を受け懇親会に参加させて頂きましたが、皆様全く年齢を感じさせず若々しく、姿勢も正しく、お元気な様子であり、只々感心させられた次第です。今回のHCD2は、第4回目でしたが、私自身はこれまで3回ほどHCD2を拝見させて頂きました。それらを通じ、HCD2を開始するにあたっての不安(先輩方々には大変失礼なのですが、「少なくとも78歳前後のご高齢」である事への不安)など微塵も感じさせない諸先輩のお元気な姿を拝見し、この事業が同窓会行事として有意義であることを確信するとともに、諸先輩から逆に叱咤激励を受けました。このHC

D2もHCDとともに防大及び同窓会の大きな行事として定着しつつあることを実感しております。

防大同窓会の会員数は、昨年、2万5千名を越え、退官されたOB数も現役自衛官数を越えるなど、同窓会として益々、円熟味を増してきております。

一方、本年3月の防大代議員会の終了後に、防大第1期生の期生会長である深山様から本年5月には第1期は期生会としての組織的な活動に終止符を打つことが報告されました。防大同窓会も一つの節目の時期を迎えている事を感じております。

また、防大自身もこれまで多くの方々の御努力により益々充実した素晴らしい大学校となってきました。特に、國分良成学校長をお迎えした以降、「新たな高み」プロジェクトを掲げ、更なる改革に挑戦しております。これまでの学生の自主自律精神をより進展させるとともに、国際交流センター設立、グローバル・セキュリティ・センター立ち上げ、先端学術推進機構の新設等々、時代の変化に応じた組織の改編も進めており、正に所謂「世界に誇る士官学校」となりつつあります。

最近、多くの防大生がいろいろな国々に留学（長期・短期）し、国際的視野を広げつつ国際交流の拡大や信頼醸成にも貢献しております。また、中には留学先でかなり優秀な成績を上げる学生も多く出てきています。昨年、米国の士官学校に留学した学生が1学期間（1セメスター；約4ヶ月）で学年最優秀の評価を受けました。

この様に、防大も時代の変革に適応できる幹部自衛官の育成機関として発展してきておりますし、学生も世界の士官候補生に負けない優秀な学生が育ってきております。正にわが母校防大は世界に誇る士官学校となってきました。

私は、全国各地で講演をしておりますが、時々「我が国の自衛隊のレベルは？」と質問されることが度々あります。その場合、私は胸を張って「我が国の自衛官は極めて優秀ですし、自衛隊は超一流です。」と答えます。

近年、自衛隊では国外での任務や訓練等いろいろな活動が多くなってきております。また、訓練や交流も同盟国の米国とのみならずいろいろな国々で行われております。この様な国際的な活動の場面においても、自衛隊の隊員は外国軍人と全く遜色ありませんし、私は寧ろ優秀と感じております。自衛隊の隊員の中心は幹部自衛官ですが、その中でも防大出身幹部の果たす役割が大きいと感じております。

この事は我が国の統合運用にも大きく貢献しております。2002年12月に統合運用を基本とする態勢へ移行することの必要性をとりまとめた成果報告書が防衛庁長官（当時）に報告され、2006年3月27日に防衛庁（当時）・自衛隊では統合運用体制に移行し、統合幕僚長が自衛隊の運用に関する軍事専門的観点からの防衛庁長官の補佐を一元的に行うことになりました。

我が国の統合運用は他国に比較しその歴史が浅いのですが、時折、統合運用の大先輩である米国や英国から「どうして日本の統合運用は円滑に進むのだろう？」と言われることがあります。

これにはいろいろな要因があると思います。長い間、私達が米軍から教えて貰ったことも大きな理由かも知れませんが、私は「防大効果」だと確信しています。統合運用が期待以上に進化している最大の要因は、防大の存在であり、防大卒の自衛官のお蔭と考えております。防大以外の幹部もいつの間にかこの活動の中に溶け込み、一体となって活動をしています。この中心的役割を担っているのが防大出身幹部であり、私は「防大効果」と言っても過言ではないと考えております。

防大同窓会も創設から約60年を迎えます。防大同窓会の目的は防大や防大生を側面から支援することであり、また、会員相互の親睦、融和・団結です。この事を基本としつつ、新しい時代の流れに沿うような活動を模索しつつ前進することが必要と考えております。当然のことながら、同窓会の活動は会員皆様のご支援ご協力がなければできません。

我々同窓会役員一同は、会員皆様方のご意見に耳を傾けつつ尽力する所存です。会員皆様方におかれましても、同窓会へのご支援を引き続き賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

■ 学校長に聞く

2019.03.19

「一般大学の現状と防衛大学校」

防衛大学校長 國分 良成



わが国の大学進学率は 60% に近づいており、まさに誰もが大学教育を受ける時代に入っている。しかし、その大学がいま大きな転機を迎えている。急激な少子化と多すぎる大学の矛盾(約 800 校)をどう解消するのか、一般教養課程を存続させるのか、文系の存在価値は何か、入試制度をどうするのか、等々が大きな課題として共通に認識され、全国の大学を揺さぶっている。

まず、少子化と多すぎる大学との間の矛盾について考えてみよう。すでに、大学の合併・吸収、自然淘汰が現実の課題として浮かび上がっている。少子化により学生定員の充足が果たせなくなった大学の数は多い。そこで、各大学はいかに学生を呼び寄せるか、頭を悩ませている。方法としては、普通の入試だけでなく推薦入試やAO入試によって学生を確保する、あるいは留学生を増やすことで(特に中国などアジアから)定員充足を満たす、などが一般的である。しかし全国の大学が一律に同じような方向に動く結果として、学生獲得競争はさらに激しさを増すこととなった。

もう一つは大学の魅力化であり、例えばスポーツに対する重点化。メディアで取り上げられる頻度の高い駅伝やラグビーなどに有力な選手を集め、宣伝効果を狙う。駅伝などでは、駅伝出場の常連校が有力高校生を獲得するためにしのぎを削っている。それ以外には、看護、介護、IT、芸術、国際性など、学校の専門性を明確にし、一定の学生層を狙う、あるいは大学の様々な施設や環境の良さをアピールする、などの動きが見られる。

一般教養課程の位置づけについても大きな議論がある。これはすでにかなり前から議論が交わされていることだが、一般教養課程と専門課程の間の有機的連携の欠如である。一般教養では専門の学科以外の第1・第2外国語、歴史、文学、数学、生物、芸術、保健・体育などの科目が並ぶが、専門科目とのつながりが明確ではない。また、一般教養の教員たちは所属する専門学科と研究上で直接に関連性がない場合が多く、となると人間関係を含めてつながりが希薄になってしま

う。一般教養課程は欧米の大学のリベラル・アーツをモデルにしたものだが、それは似て非なるものであった。率直に言えば、わが国の大学では専門課程に押されて、個々の教員が専門課程と有機的な関連もないままにそれぞれの興味の範囲を教えるだけになっていた。

こうした矛盾を解消しようと、多くの大学で一般教養の教員たちを一つにまとめて新学部や語学センターなどを作り、独立性を保たせる方向に動いた。こうした動きの背後には、一般教養の縮小化と専門重視の動きがある。総合大学は別として、比較的小規模な大学はそれぞれの特徴を出そうとしており、またそうでなければ生き残れなくなっている。最近、医療福祉、調理、アニメ、ファッションなどの専門学校を大学に格上げする専門職大学の動きが顕著であるが(大学への申請数は多いが、認可されたのはまだ少ない)、それはまさにこうした事情を背景にしている。

一般教養の問題と関連もあるが、文系学部の縮小もしくは廃止の議論も根強くある。将来はAIを中心に科学・技術・情報の世界が広がり、科学的で明確な結論の出にくい文系は不要ではないかとの議論がそれである。特に、文学や哲学といったような部門に対する風当たりが強い。全国約800の大学のうち、約8割が私立、そして私立の多くは文系である。確かに、大銀行などの話を聞いても、将来的に支店はほとんど消滅し、文系中心の営業の仕事は先細りとなり、AIがそれに代わるという。しかも、人口減少によって国内の市場価値は小さくなり、もっぱら営業は中国を中心としたアジア世界に広がるであろうと言われている。

しかし、文系の重要性は人間性の成長と関わりが深いことを忘れてはならない。現実社会や人間関係はすべてが0(ゼロ)と1の間で割り切れるものではなく、実際にはその間は無限である。文系では、特に哲学、文学、倫理学、歴史学、心理学などは、今後理系中心の社会となっても不可欠な学問分野であるように思われる。なぜなら、それらは人間形成に欠かせないからである。

文科省の指導のもとで、入試改革も急激に進んでいる。従来の入試センター試験は廃止となり、代わって来年度から大学入学共通テストが導入される。知識偏重から、記述式の試験が増え、英語も幅広く読む、聞く、話す、書くに力点が置かれる。また、英語に関しては英検など民間の試験の成績提出などが課される予定だが、東京大学などはこれを必須としないと発表し、文科省の方向性に必ずしも従っていない。

さて、これらの動きに対して防衛大学校はいかに対応するのか。当然ながら、一般大学と足並みをそろえる必要がある部分とそうでない部分の両面がある。防大の場合、一般大学と共有する課題は、少子化による受験者数の減少をいかに食い止めるかという点である。それ以外の部分では防大特有の目的と性格を優先し、重視しなければならないことが多い。少子化による受験者数の減少を避けるために、防大と自衛隊の魅力を若者に伝える努力を続けなければならないし、それと同時に、絶えず入試について最善の在り方と方法を検討し続けなければならない。

言うまでもなく、純粋な国立大学である防大が、学生獲得のためにスポーツやその他の面で優遇策を取ることは絶対に許されない。とはいえ、防大にはもともと一つの大きな優遇策が存在していることを忘れてはならない。全国の大学は奨学金の創設に頭を悩ませているのが現実だが、防大は学費がかからず、しかも学生手当もあるという点である。今日では約半数の一般大学生が何らかの奨学金を受け取っている。多くは貸与であり、卒業後返済の義務があるため、過重負担となる場合も多く、社会問題ともなっている。

防大は幹部自衛官の養成を目的とする学校であり、その出発から究極の元祖・専門職大学でもある。しかし創立当初から防大は一般大学と同様に専門の学科を多数もち、一般教養科目と専門科目に分かれており、この点で一般大学と差はまったくない。しかし一般大学は現在、教養科目を減らして専門教育を重視する方向に徐々に進んでいるが、防大ではむしろ一般教養を重視する方向に動いている。それは最近、防大に教養教育センターが設置されたことにも現れている。

防大教育は知・徳・体の三位一体の形成を目指しているが、最終的には国家・国民・世界のために一生を捧げる使命感を涵養することに目標がある。部下から、そして国民から信頼されるために、幹部自衛官となる防大卒業生は知的に武装された人間性を備えていなければならない。そのために一般教養と読書力、それに国際性と語学力が必要である。つまり、防大教育において幅広い教養を軽視することはできないのである。

文系の縮小・廃止についていえば、防大でそれはありえない。むしろ今後の世界で重要なのは文理融合である。今後、ハイテク化やIT化が急速に進むにつれ、防衛分野でも理系的センスがより重要となることは明らかである。しかし同時に、今後の複雑な世界状況を考えると、国際関係や地域研究の知識、それに歴史的視野が必要とされる場面も多くなるであろう。それに加えて、前述したようにリーダーとしての人間的魅力を形成するうえで、哲学、倫理学、史学、心理学などの分野が重要性をもつことになると思われる。

公務員組織の習性を分析した『パーキンソンの法則』（至誠堂、1961年）で有名なC・N・パーキンソンによれば、公務員制度は中国の科挙制度を東インド会社が人事採用で導入し、それをイギリス政府が検討と改良を加えた結果、1855年の公務員選抜制度に取り入れたという。そのときの行政官ポストの試験制度の基本は、「その文学的性格にあり、古典の知識、作文、作詞の才能、試験の全過程を完遂する精力などをテストするものだった」（同書、72頁）という。

生存競争時代に突入した一般大学と異なり、防衛大学校は日本において唯一無二の大学であり、一般大学と同じようにバタバタ動く必要はない。しかし一般大学が抱える課題は、防大にとって必ずしも対岸の火事ではない。今後とも、世界情勢や時代状況を見極めつつ、それらに即応しつつも、同時に将来の幹部自衛官養成という我々の使命に特有の教育体系を絶えず模索し続けなければならない。

■会長ルーム・活動録

◇平成30年度第3学年部隊実習激励

2018. 7. 25

杉本同窓会会長は、7月9日（月）陸上自衛隊金沢駐屯地第14普通科連隊で部隊実習中の第3学年陸上要員を激励しました。金沢駐屯地到着後、第14普通科連隊長 梨木1等陸佐を訪問し、部隊実習訓練支援の概要説明を受け、その後懇談しました。

今年の第3学年陸上要員の部隊実習は、約230名の要員が北海道・沖縄を除く全国23コの普通科部隊で3週間の実習を行っていました。実習にあたっては、師・旅団長の講話、連隊長の講話、40kmの徒步行進、機関銃実射、分隊攻撃、警衛勤務等の防大の実習要望科目を履修するとともに部隊長の計画による実習が行われていました。第14普通科連隊は7月8日（日）までBCTC（指揮所訓練センター）訓練を実施中であり、防大生に最新の指揮所訓練を研修させたほか、敦賀港に入港する海自護衛艦（海上要員実習中）、空自小松基地（航空要員実習中）の研修など統合運用を見据えた研修も計画されていました。

会長は、同窓会陸代議員でもある梨木連隊長と懇談の後、機関銃実射中の学生を激励するため、駐屯地近傍の演習場に移動しました。10名の学生は、機関銃実射初級検定に合格すべく第14普通科連隊の幹部やベテラン陸曹の指導を受けながら真摯に取り組んでいました。



会長と連隊長の懇談



実射中の学生と陸曹からの指導

実射訓練終了後、射場管理棟において会長から学生に対し講話を実施しました。会長は自らの経験に基づき、人生や経験に無駄なことは一つもなく「人間万事塞翁が馬」であり、何れの職種や職務内容、勤務地においてもその時その場で一所懸命取り組むこと、感謝の気持ちを常に持つことなど幹部自衛官として歩んでいく上での考え方を紹介しました。また、今後の安全保障環境や統率の場に立つ学生たちに「英語の他、もう1つの外国語を勉強する」こと、「本を読み心に留めた言葉をメモする」ことなどを学生に推奨しました。



会長講話に聞き入る防大生

夕刻、実習支援部隊の他、駐屯地業務隊長、会計隊長など駐屯地所在の同窓生も加えた懇談会を行いました。途中、学生一人一人から自己紹介と今後の抱負が発表され将来の幹部自衛官に盛大な拍手が送られるとともに、学生は会長を始め様々な先輩と人生や部隊勤務などについて懇談し、予定の時間を大きく超えて懇談会は終了しました。



会長と学生の懇談



連隊長・先輩と学生の懇談

最後に、第14普通科連隊長をはじめ、中部方面隊、第10師団、連隊本部、金沢駐屯地所在部隊及び防衛大学校訓練課の方々のご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。

(本部事務局 総務部 27期陸 星指 隆記)



会長、連隊長、先輩、部隊担当者と防大生

◇防衛大学校平成30年度開校記念祭等参加

2018. 12. 23

11月10日（土）～11日（日）の2日間にわたり、杉本同窓会長は防衛大学校で実施された第66回開校記念祭等の行事に参加しました。今年度の防衛大学校では統一テーマを「未来へ繋ぐ」(Road to the future)とし、開校祭行事の中心である観閲式をはじめ、各校友会の活動紹介など多くの企画や行事を通じて、学生達の未来への希望や熱意が感じられる開校祭でした。

10日は、同窓会会食を主催するとともに、顕彰碑献花式に参加しました。同窓会会食は、本館会議室において、同窓会総務部長の司会で行われました。國分学校長をはじめ、各幕僚長代理などの来賓を迎え、各期代表が参加して、和やかに会食を行いました。次いで、人文科学館南側顕彰碑において、顕彰碑献花式に参列し、103柱の御霊に哀悼の誠を捧げました。本年度は新たに3名の顕彰者が祀られ、厳粛に式が挙行される中、國分学校長に引き続き杉本同窓会長が顕彰の辞を奉読し、御霊の安らかならんことと、御遺族の健勝を祈念しました。

11日には、記念式典・観閲式、祝賀会食、第42期ホーム・ビジット・デイ（HVD）に参加しました。記念式典・観閲式では、学生による威風堂々たる観閲行進が行われました。この際、卒業生を中心とした飛行部隊による祝賀飛行や空挺降下が式典に花を添えました。祝賀会食は、内外から多数の来賓を迎えて学生食堂で行われました。杉本同窓会長は同窓会活動の一端を紹介するとともに防衛大学校の発展を祈念して万歳三唱を行い、祝賀会食は盛会のうちにお開きとなりました。第42期生の卒業20周年を祝うHVDに参加した後、防大名物の「棒倒し」において、各大隊一丸となった応援と激しい戦いを観戦し、勇壮な防大の伝統が継承されていることを確認しました。

（同行者 28期陸 石田 裕 記）



同窓会会食における
杉本同窓会長と國分学校長



同窓会会食に参加した各期生会代表



杉本同窓会長顕彰の辞



各期生会代表による献花



祈念式典・観閲式の整列



観閲式に花を添えた空挺降下



祝賀会食國分学校長挨拶



祝賀会食杉本同窓会長の万歳三唱



HVD 杉本同窓会長激励の言葉



HVDの第42期生参加者



棒倒しの状況

■防衛大学校関連

◇副校長に聞く

2019. 3. 19

「大学淘汰時代への入り口に立って」

防衛大学校副校長（教育担当） 香月 智



同窓会の皆様におかれましては、前線の勤務で、緊張の毎日かと拝察申し上げます。このたび、教育担当副校長に任じられました、防衛大学校23期生の香月です。よろしく、お願いします。

せっかくの機会ですので、防衛大学校教育が追う二兔のうちの一兔である「防衛大学校の大学教育」について、一文寄せさせていただきます。

手元にある資料によりますと、昭和19年における大学数は、49大学（帝大7、官公14、私大28）とあります。約10年後の防衛大学校が創設された昭和30年頃の大学数は、大学総数は226、国立大学の定員は、4万6千人弱、大学進学率（18歳人口比）は8%弱、高校進学率は50%強です。戦前と戦後で、極端に「大学の実態」が変化していることが分かります。社会的な認知は、事実より遅れて形成されますので、防衛大学校創設期の諸先輩の中には、「そんなに大学があるはずがない」とか「大学進学はもっと狭き門だった」と感じておられるのではないのでしょうか？

ちなみに、大学設置基準は、昭和31年に制定されたそうです。その上位法である昭和22年の学校教育法には、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とあります。昭和22年の大学進学率は7%程度ですので、集団の中核を担うべきエリート教育のにおいがします。

これを踏まえて、「（防衛大学校の）教育課程においては、大学設置基準に準拠して、一般教育、人文・社会科学又は理工学および防衛学に関する学理及びその応用を授け、幹部自衛官として必要となる学力及び技能を育成する」と、防衛庁訓令に定められたのは、昭和36年のことですので、防衛大学校の創設期には、

「大学教育を行うこと」が、「大学」校としての自意識の表われだったとも考えられます。

大学設置基準が施行されて、30年後の平成3年に大学設置基準の大綱化というものが行われます。そのときのキーワードは、「大学の大衆化」であったと記憶しております。大学進学率が50%を超えるので、「もはや、大学はエリートを養成するためのものではない」ということでした。この時期に、防衛大学校は本科卒業生への「学士授与制度」が発足したのです。

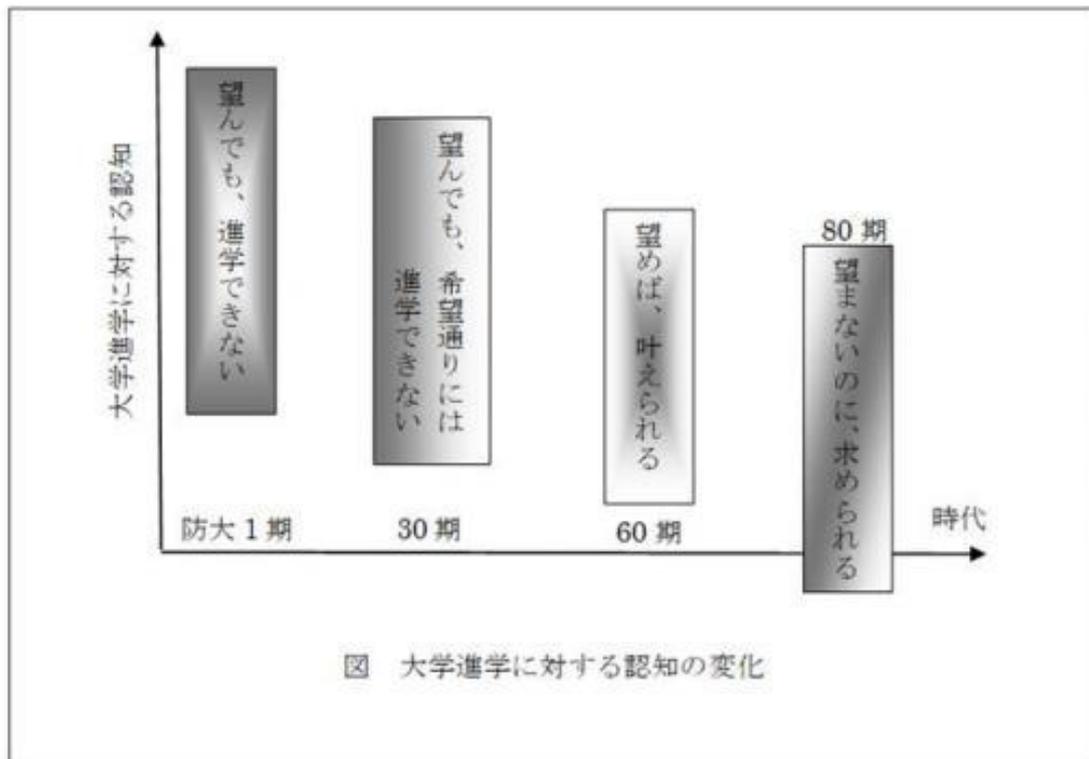
それから30年弱を経て、平成30年における全国の大学数は、779校であり、総定員は約60万人となりました。大学進学率は、60%弱ですので、中学校の同級生10人中の6人がエリートというのは、確かにおかしい話となります。つまり、平成3年における文部科学省の未来予測は、的を射たものであったと言えるでしょう。

現在、その適切な予測能力のある文部科学省が、大学入試制度の大幅な修正について議論していますが、その背景にあるキーワードは、「大学淘汰」だそうです。一昨年に、大学総定員数と総受験者数が均衡する「大学全入時代」を迎えました。そのうえで、今後十数年で、総受験者数が、現在の総定員数の80%程度にまで減るものと予測されています。

以上述べてきた大学に対する雰囲気の変遷を模式的に示すと、図のようになります。高校生の会話で想像しますと、防衛大創設期には「ええっ、大学に行くの？（羨望）」が、平成に入りますと「大学に行く（感嘆詞なし）」になりました。そして、平成の次の時代には、違うトーンの「ええっ、大学に行くの？（懐疑的疑問符）」に変わりそうです。

今では、私立大学はもとより、国立大学も、独立行政法人化され、「大学経営」を求められております。一方、全大学が現状に対して相似的に縮小して、経営上の均衡点を見つけることは、極めて困難です。その結果、「選択と集中」と言われる作用が、強く働くことになるでしょう。

そのうねりの中で、防衛大学校が外部から「選択される大学」であってほしいものです。そのために、同窓会を含めた組織内部において「選択される大学たれ」と、欲する空気が継続して存在し、時宜に応じた動きを生じさせてほしいものです。



◇副校長に聞く

2019. 3. 19

ごあいさつ

防衛大学校副校長 辻 秀夫
(企画・管理担当)



杉本正彦会長はじめ防衛大学校同窓会の皆様におかれましては、平素から防衛大学校に対して物心両面から多大なご理解、ご協力をたまわり、わけても校友会活動をはじめとする学生活動に対して一方ならぬご支援を頂き、長年に亘り防衛大学校における学生の教育訓練の充実に絶え間ないご貢献を果たしてこられたことに対し、深く敬意を表し、この場をお借りして改めて厚く御礼を申し上げます。

近年、防衛大学校は、國分良成学校長の強力なリーダーシップの下、防衛大学校の新たな高みに向けて飛躍を追求した数々のプロジェクトに取り組み、学校長のご指導、教職員・学生の精力的な努力と協力、防衛本省のご理解、同窓会をはじめ関係団体・機関の皆様のご支援等を得て、着々と成果を挙げ今日に至っております。

「すべては学生のために」。これが國分学校長が示されている防衛大学校における業務遂行の基本理念であり、私どもは常々この言葉を服膺し、絶えず防衛大学校の基本的使命に思いを致し、防衛大学校の主役である学生の成長を助け促すという原点を忘れず日々職務に当たっているところです。

しかしながら、毎日毎夜の学業、訓練、校友会活動そして学生舎生活と多忙かつ拘束の大きい日常生活を送る学生達にとっては、心身ともに充実し安心して防大生活に打ち込み、その能力を最大限に発揮するためには、防大教職員の指導やご家族のご支援のみならず、過去に楽しくも辛くある4年間の防大生活を過ごされた上で、今や現役幹部あるいはOB・OGとして立派にご活躍されている防衛大学校同窓会の多くの先輩方の存在とご声援が何よりも励ましとなり、自信を与え、また目標となっていることであらう。

学生の成長と大成に向けて、私ども教職員は時には厳しく愛情を込めた叱咤の声を飛ばすこともあります。他方で、かつての試練を克服して防大生としての苦勞を肌で知り、汗と涙を分かち合う同窓会の皆様方が温かく見守り、心の支えとなっていていただくことによっではじめて、使命感旺盛な心身ともに壮健な防大生の育成が実現されてきていることはこれまでの長い歴史が証明しております。

私どもとしては、今後とも、同窓会の皆様と互いに手を取り合って、真に頼もしい幹部自衛官要員を育成するため、精一杯取り組んでまいりたい所存です。

さて、昭和32（1957）年に第1期生が本校を巣立って以来、これまでに第62期生までが本校を後にし、本年3月には第63期生が卒業を迎えて幹部自衛官としての道を進み始め、同時に同窓会の皆様の仲間入りをします。

単純に計算しますと彼らの大半が誇りに満ちた自衛官としての使命を全うし尽くすであろう2050年代半ばごろには、防大はすでに創立百周年を迎えて第100期生が在籍しており、追って間もなく防大同窓会も創立百周年を迎えようとしている状況でありましょう。

その時代の世界が、また日本がどのような姿になっているのか、我が国の防衛や国際安全保障環境が如何なる様相を呈しているのか、今の段階では予測も想像も困難ですが、ただ確実に言えることは、その時代、すなわち三十数年後の国と国民を取り巻く姿かたちは、今まさにこれから防大を巣立ち、国・国民の平和と安全のため、防大時代に築いた強固にして不朽の基盤を土台に果敢に防衛の務めに取り組み、三十数年間にわたり全智全能を傾けてその持つエネルギーを燃焼し尽くしたであろう四百数十名の第63期防大卒業生の渾身の努力の結果としてもたらされる、ということです。

同じ時間幅で過去を振り返ると、三十数年前、当時冷戦のさなかであった昭和末期から今日に至るまでの間、国際情勢、防衛省・自衛隊を取り巻く国際安全保障環境は激変しましたが、幸いにも、我が国自身は概ね平和のうちに推移し、経済・財政・社会情勢においては様々な難題を抱えつつも、国民は戦火に巻き込まれることなく静かに平成の終幕を迎えようとしています。この背景には、国家・国民のさまざまな努力があることは言うを俟ちませんが、その一端には防衛省・自衛隊の各般の施策とともにそれを支えた歴代二万数千名に上る防大卒業生の皆さんの血のにじむような献身的な努力があることはいまでもありません。

同窓会の皆様方は、それぞれ永きにわたって身をもって防衛の務めを完遂され、あるいはまさに今この時に当たって緊張に満ちた任務遂行のさなかにあつて、後続く防大卒業生、在校生に対して立派な範を示され、幹部自衛官を志す若者にとって確かなよすがを与え、その決意を確固たるものにして頂いております。これからの三十数年間に如何なる事態が起きようとも、新卒業生は、未来の安全保障を任せるに足る防人達のリーダーとして、この防大で身につけた使命感と知力、体力、統率力、そしてそれらに裏打ちされた広い視野、科学的思考力及び豊かな

人間性を立派に実践、発揮し、これから起こる変化に機敏に適応し、危機に立ち向かい、国の平和、国民の安全・安心のため全力で奮闘努力し、そして、頼もしくその務めを完遂してくれることであらう。

長年にわたり皆様から賜りました無数のご薫陶を無にせず、国家・国民の輿望を担って波逆まく荒海に新たな船出をしようとする彼ら彼女らを、私ども教職員としては引き続き同窓会の皆様と相携えながら、力の限り応援していきたいと思っております。

そして、望むらくは平和のうちに、いつの日か防大・防大同窓会創立百周年を彼ら彼女らとともに祝うべきときを穏やかに迎えたいと切に願うものです。

◇幹事に聞く

2019. 3. 19

「防衛大学校の現状と課題」

防衛大学校幹事 陸将 納富 中
(29期・陸上)



昨年8月1日付けで第50代幹事を拝命しました、第29期生の納富です。防衛大学校はおろか、陸上自衛隊においても教育機関での勤務はなく、自分にとって全く初めての分野となりますが、母校で、次代の日本の安全保障を担う将来の幹部自衛官を育成する重要性を深く認識し、微力ながら努力していく所存ですので、宜しくお願い致します。

さて、小原台に至る急坂を登りきれば目に飛び込んでくる真っ白な壁と正門、本館に通ずる道路の左右に広がる青々とした芝生、さらに建て直されたとはいえ本館とその後ろに聳える時計台と、部隊ではあまり感じる事のできない上品で開放感溢れる雰囲気は、多くの卒業生に在校当時から変わらぬ防衛大学校を感じさせますが、半年の勤務を通じ、確かに変わらない点もある一方で、色々な面で変化していることを実感させられました。

本科学生数は約2,000名と変わっていませんが、自分の在校当時との大きな違いは、女子学生の存在と留学生の増加です。女子学生は現在228名(留学生含まず)が在籍し、全学生の約12パーセントを占めています。現在の2学年である第65期生からは、以前より15名多い60名を募集していますので、今後2年間、女子学生数はさらに15名ずつ増えていくことが見込まれます。既に26年の歴史を有する女子学生ですが、各自衛隊で活躍する優秀なOGから受ける印象通り、男子学生に引けを取らず日々努力している姿には頼もしさを感じます。学生舎では男子学生と同じフロアの一角に起居しており、初度視察の際には防犯カメラを除けば特段のセキュリティ・システムも無いことに戸惑いを覚えました。裏返せば厳正な規律が維持されている証拠であり、将来幹部自衛官を目指す者にとっては当然のこととはいえ、学生の志の高さに感心した次第です。

また、留学生の増加にも驚かされました。現在、本科には11カ国から97名、理工学研究科には3カ国から17名の留学生が在籍しています。これに加え、本科入学前の日本語課程を履修する通称「ゼロ学年」が存在し、彼らも学生舎で生

活することから、本科留学生は防衛大学校に5年間どっぷり浸かることとなります。因みに、現在留学生を最も多く派遣しているのがベトナムで、本科23名(ゼロ学年を含む)に加え、研究科13名の計36名が在籍しています。また、ベトナムに加え、ミャンマーやラオスといった、同盟国アメリカが関係構築に気を遣う国からも留学生を受け入れているとともに、留学生派遣の歴史が最も古いタイでは、海軍参謀総長と空軍司令官を輩出する等、わが国のインド・太平洋戦略にも大きく貢献しています。加えて、短期、長期合わせ、8カ国から51名の士官候補生等を受け入れる一方で、防衛大学校からは92名の学生を14カ国に派遣しています(平成30年度実績)。また、外国語教育にも力を入れており、文系、理系を問わず取得すべき語学の単位数が増えるとともに、最近ではアラビア語やポルトガル語も教育されています。さらに、全学生が受験するTOEICも、昨年9月に行われた試験の平均点は500点を超える等、国際感覚の伸長には著しいものがあります。

防衛大学校の重要な柱の一つである学生舎生活に関しては、2学年から所属大隊が変わらないシステムや各種競技会を通じ、各大隊のまとまりや団結といった点では昔と変わらない、或いは昔よりも進歩していると言えるかもしれません。特に、カッター、断郊、棒倒しといった伝統的な競技会に加え、先ほど触れたTOEICの成績や書評を競うビブリオバトル、隊歌等11の競技会の成績に基づき年間最優秀大隊を表彰する制度があり、学生が学生舎生活の持つ意義をより身近に感じられるようになっていきます。一方で、家庭環境の変化をはじめ、高校卒業時までの縦社会での経験の希薄化や、コンプライアンスの厳格化等の中で、「学生間指導のあり方」については、あるべき姿を模索する状態が続いているのが現状です。既に、概念についてはきちんと整理されているにもかかわらず、学生の中には、その本質よりも表層的な面に捉われ、本来あるべき指導ができない、或いは指導を忌避するといった傾向も看取されることから、再度趣旨の徹底を図る一方で、自主自律の原点に立ち返り、長期勤務学生や綱領委員長を中心に、学生自身に考えさせることにより、主体性や参画意識を引き出していくことが大きな課題と認識しています。

校友会活動については、成績だけに着目すれば、16年ぶりの箱根駅伝出走をはじめ少数の例外を除けば厳しい状況が続いています。一方で、学生の気持ちの中での校友会の重要性、或いは学生の成長過程に果たす校友会の重要性については些かも変化はなく、学生は全力で校友会活動に取り組んでいます。國分学校長は、「自己紹介は、校友会よりも専攻が先ではないか？」と苦笑いされますが、まさに学生の偽らざる本心を良く表している一例です。また、校友会を通じ、退官された方を含む幅広い年代のOBとの絆を築けるようになっていくことは、学生の大きな財産となっています。是非、所属された校友会の後輩を温かく見守っていただければ幸いです。

なお、ご承知の通り、若年人口減少の中、各大学は生き残りをかけて熾烈な戦いを繰り広げており、防衛大学校は他大学とは性格を異にするとはいえ、優秀な学生を獲得するための努力が今まで以上に重要となってきました。平成30年度の入学試験では、総受験者数は約2,000名も減少してしまいました。二次試験受験者が昨年よりも多かったため一安心したことは事実ですが、この傾向は今後も長く続くことが予想されます。同窓会の皆様には、優秀な学生獲得のためのご協力もいただきたく、宜しくお願い致します。

最後になりますが、幹事に着任し、学校及び学生が、同窓会からかくも多大なご支援をいただいていることについて認識を新たにしました。学校勤務者の一人として、同窓会に心より感謝致しますとともに、引き続き宜しくご指導のほどお願い致します。

◇防衛大学校第66期生会設立総会出席

2019. 3. 31

平成31年3月7日（木）、防衛大学校において、第66期期生会の設立総会が開かれました。期生会は、総員533名、うち女子学生72名、留学生7か国24名をもって設立され、期生会長に第212小隊平井涼子学生が選出されました。

同窓会からは、千葉徳次郎副会長が出席し、祝辞を述べるとともに、設立のお祝い金と期生会に対する助成金を手渡しました。

総会に先立ち、千葉副会長は、國分良成学校長、辻秀夫副校長、香月智副校長、納富中幹事及び小原台事務局長代理森迫1等陸佐と懇談しました。懇談は、千葉副会長が防大幹事経験者ということもあり、近年の学生の状況、防大のあるべき姿や学生時代の思い出など、多岐にわたって大いに盛り上がりました。

11時から記念講堂において設立総会が開催され、平井期生会長以下9名の役員紹介に引き続き、平井期生会長の所信表明が行われました。この中で、平井期生会長は、「期生会のテーマとして、『我々はどこまで行くのか』をあげ、一步一步、前へ上へと向かっていく」ことを誓うとともに、期生会員には「第66期生としての誇りを持って欲しい」と要望し、力強く所信を表明しました。

國分学校長の祝辞では、森敦の芥川賞受賞作品『月山』から一場面を引用し、一見無駄に思われるような努力を一つ一つ積み重ねていくことの大切さを説きました。「防衛大学校は、知識、体力、人間関係など幅広く磨いていくことができる唯一の学校であり、部下を守り、社会を守り、国を守り、世界の平和を守るため、人格の陶冶に努める」ことの重要性を特に強調しました。

引き続く、千葉副会長の祝辞では「諸君の入校式でも述べたとおり、1学年はインターンともいうべき期間であり、防大生は何のために、何をしなければならないのか、何を期待されているのかを考えてきたと思う。初代榎校長の銅像が1大隊の舎前にある理由は、課業行進など学生が必ず通る場所に設置することで、原点に立ち返るためである」と常に建学の精神を忘れることなく精進することの重要性を示しました。また、防大、幹部候補生学校、レンジャー課程など同期生に助けられた経験を紹介し、同期生の「縁」「絆」を大切にしたいと述べられました。

式の締めくくりとして、学生歌を斉唱し、設立総会を終了しました。

12時からの会食は、1学年のみの会食となり、来賓とともに和やかな雰囲気の中で進められました。各中隊代議員もビデオにより紹介され、大いに盛り上がる中、第66期期生会設立総会に伴う行事は全て終了しました。

（本部事務局 28期陸 佐々木 博茂記）



懇談



役員紹介



期生会長所信表明



学校長祝辞



千葉副会長祝辞



助成金授与



会食

◇同窓生著作等の寄贈

2019. 3. 16

平成31年2月28日（木）、平成30年度の同窓会事業である「同窓生著作等の寄贈」の一環として同窓生による著作計32冊を同窓会から防衛大学校各中隊に寄贈しました（16個中隊各2冊）。寄贈に当たっては小原台事務局長代理の関口2佐（32期）から学生代表の第23中隊学生長岡田学生（63期）に関口2佐自身の著作である「誰が一木支隊を全滅させたのか ガダルカナル戦と大本営の迷走」（芙蓉書房出版）と「海軍善玉論の嘘 誰も言わなかった日本海軍の失敗」（光人社NF文庫、是本信義著、3期）の2冊が贈呈されました。

本事業は、防衛分野をはじめとする各方面の専門家として活躍されている同窓生の著作等を母校に寄贈し勉学の一助にしてもらおうという目的で実施しているものです。

今回は、現在同窓会HPの同窓生人材バンクに登録されている方の近著を中心に希望調査リストを作成し、この中から学生の希望する図書を寄贈しました。

同窓生の執筆分野は防衛論をはじめリーダーシップ論、人材育成法、戦史、メンタルヘルス等多岐にわたり、現役学生からも関心が高いようでした。

（本部事務局 28期陸 多出村 秀勝記）

寄贈図書一覧			
タイトル	著者	防大期	希望数
海軍善玉論の嘘 誰も言わなかった日本海軍の失敗	是本信義	3	1
逆説の軍事論	高澤暉	4	1
宇宙戦争を告げるUFO 知的生命体が地球人に発した警告	佐藤守	7	2
誰でもわかる防衛論 日本が生き残るための国家戦略の提言	黒川雄三	11	1
国際情報戦に勝つために 情報力強化の提言	太田文雄	14	1
日本の敵	田母神俊雄	15	1
自衛隊元最高幹部が教える経営学では学べない戦略の本質	折木良一	16	1
即動必遂	火箱芳文	18	3
指揮官の条件	高嶋博視	19	2
東京オリンピックとテロリズム	佐渡龍己	22	2
自衛隊メンタル教官が教える 人間関係の疲れをとる技術	下園壮太	25	2
沈黙の自衛隊 知られざる苦悩と変化の60年	瀧野隆弘	25	1
高校生にも読んでほしい安全保障の授業	佐藤正久	27	2
イラク自衛隊戦闘記 佐藤正久	佐藤正久	27	1
高校生にも読んでほしい海の安全保障の授業	佐藤正久	27	1
自衛隊式 最強のリーダーシップ	石田英司	28	2
「自分に自信がない人」を卒業する44のヒント	村井嘉浩	28	1
誰が一木支隊を全滅させたのか ガダルカナル戦と大本営の迷走	関口高史	32	2
防衛大式 最強のメンタル	濱潟好古	51	4
防衛大流 最強のリーダー	濱潟好古	51	1
合計			32



今回寄贈された図書（全32冊）



関口2佐から岡田学生へ贈呈



寄贈された図書の前に立つ岡田学生



寄贈図書は各中隊の集会室書棚に

◇防衛学特論研究レポート発表会

2019. 3. 29

平成31年3月4日(月)に古賀理事が防衛大学校で実施された平成30年度防衛学特論研究レポート発表会に出席しました。

本発表会は、防衛学教育学群の主催で、4学年全員が前期ゼミでテーマを決めた内容をレポートにまとめ、審査を経て優秀者15名の発表が実施されました。発表会は、陸、海、空要員ごとに分かれた3会場で、3・4学年の全学生、防衛学教育群教員、他学群教員も多数参加しました。優秀者発表が10分、その後、質疑応答が15分と防衛学における卒業研究発表会という様相でした。研究テーマは、統率、国防、戦史、軍事技術、戦略などの分野ごとに分かれ、最新の国際情勢に焦点が当てられた研究になっていました。

発表会終了後、同窓会支援の記念品が優秀者に贈呈されました。記念品は、盾、学生像トロフィー、万年筆の3種類から学生の希望で渡されました。

学群長 坂本空将補から、「ご支援に感謝しています。学生と教官が真剣にゼミで議論した成果をまとめ、発表するという学術・教育の両面で有意義な発表会になりました。また、日本人学生だけでなく留学生も真剣に取り組んでくれました。引き続きご支援をお願いします。」と同窓会あてにメッセージを頂きました。

同窓会では、来年度以降も本研究発表に支援を継続する予定であります。

(本部事務局 28期空 相原 武士記)



発表会の様子



優秀者への記念品贈呈



記念品（盾、学生像トロフィー、万年筆）

◇断郊・持続走競技会激励について

2019. 3. 21

平成31年3月11日（月）、前夜からの風雨が収まり、やや強い風とにわか雨の中、観音崎地区及び校内において恒例の断郊・持続走競技会が実施され、同窓会を代表して永井理事が小原台を訪問しました。

当日、観音崎灯台地区において断郊競技の出走を激励、校内の槇先生銅像付近を経てゴールの陸上競技場へ移動、第3学年学生の力走を防大4役とともに応援しました。

4役、小原台事務局との会食は、忙しさを増す年間予定、増加した留学生、古林学生箱根駅伝参加までのエピソードなどを交えながら和やかに行われました。

午後は青空が戻り、卒業直前の第4学年による駅伝方式の持続走競技会が実施されました。応援の合間には学生・職員とも声を交わし、伸び伸びとした雰囲気を感じることができました。

分隊員の団結と力走の結果、断郊は第2大隊が、持続走は第3大隊が優勝しました。また、箱根駅伝にも出場した古林潤也学生は持続走競技会男子個人の部で優勝しました。

【断郊競技会（3学年）の結果】

○大隊対抗の部

第1位：第2大隊 38分49秒

第2位：第4大隊 40分11秒

○分隊対抗の部

第1位：第301分隊 31分08秒

第2位：第401分隊 31分26秒

第3位：第201分隊 31分36秒

【持続走競技会（4学年）の結果】

○大隊対抗の部

第1位：第3大隊 19分21秒

第2位：第4大隊 19分34秒

○チーム対抗の部

第1位：第4大隊 8 2時間22分46秒

第2位：第3大隊 4 2時間22分53秒

第3位：第4大隊 7 2時間24分27秒

○個人の部

男子第1位 古林 潤也 14分05秒

女子第1位 中畑 美紀 18分53秒

【閉会式】

平成31年3月14日（木）、卒業式を控えた忙しい年度末日程をこなす中での閉会式は、年度最優秀大隊などの各種の表彰とともに記念講堂で実施されました。競技会副賞のメダルが防大同窓会から寄贈であることが紹介され、メダルを学校長、幹事とともに授与した永井理事が挨拶に立ちました。永井理事は平成30年度最優秀大隊の第3大隊出身であることなどを交えて自己紹介し場を和ませたあと、「各学年での競技会という試練を乗り越えた経験が一人一人の暗黙知になり、隊員の前に立った時に必ず役に立つ」と力強く述べ、優勝を祝すとともに学生の健闘を讃えました。式の最後に國分学校長が訓辞をされ、目前に迫った卒業式への意欲と期待で締めくくりました。

また当日は、卒業前の謝恩会も行われ、来賓の方々と行き交いながら正門に向かい、防大を後にしました。

文末になりましたが、この訪問の準備から足かけ2日間に渡った競技会当日、閉会式を通じて、暖かくご支援頂いた同窓会小原台事務局の皆様には感謝申し上げます。

（本部事務局 28期陸 間瀬 元康記）



分隊対抗の部
第1位の301分隊と出走前に



雨上がりの学生舎前を
駆け抜ける分隊



陸上競技場において
ラストスパートを応援



國分学校長以下の皆様との会食



陸上競技場で國分学校長を囲んで



タスキを受け取り
スタートする古林学生



メダルを授与した学生と握手する
永井事務局長補佐



年度最優秀大隊 第3大隊への表彰

■同窓生は今

◇第62期生に聞く（その1）

2018.12.5

「幹部候補生学校で得られたこと」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第3候補生隊第4区隊

一般幹部候補生 陸曹長 松田 鉄平



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第99期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程に入校中の防衛大学校第62期卒業生、松田候補生です。

私は、防衛大学校を卒業し、学業や体力面で多大な不安を抱えながら幹部候補生学校に入校しました。幹部候補生学校での修学は、防衛大学校での生活とは異なる部分がいくつかありました。具体的な例として、修学の内容は、戦術や通信技術等の、より実戦に近い内容を学び、訓練の内容も一隊員として動くのではなく分隊長や、小隊長等、指揮官として行動することが多くなりました。これらを通じて幹部候補生学校での教育は、将来の指揮官として必要な知識や技能を高めているという事を実感することが出来ます。

また、幹部候補生学校では、射撃検定や高良山登山走検定、藤山武装障害走検定など、数々の区隊対抗による検定があり、各区隊は、これらの検定で優勝を勝ち取る為に、切磋琢磨して、日々練成に励んでいます。8月上旬に行われた高良山登山走において、私は日々の練成では検定の合格基準に到達することはできなかったのですが、本番当日、「絶対に目標を達成してやる」という強い意思と、周りの温かい声援によって、目標に到達することができました。高良山登山走では、絶対に自分に屈しないという不撓不屈の精神を涵養できたと感じました。

今回、「小原台だより」に寄稿させて頂くにあたり、私が幹部候補生学校で特に学ぶことができた2点を記します。

1点目は、「私達は一人ではない」ということです。辛く厳しい訓練や、日々の三役（小隊長、小隊陸曹、学習係）勤務において、時には投げ出したり、逃げ出したくなる時もありました。しかしながら、如何なる状況においても自分の周りには、励ましあいながら成長を共にする同期や、厳しくも私達の成長を期待して指導して下さる付教官、助教、そして区隊長がいます。

実際、私も、野営訓練において小隊長勤務をした際、何をしても上手くいかず、投げ出してしまおうかと一瞬考えたりもしました。しかしながら、同期からの適切なアドバイスや、指導部からの教育的指導により、困難を乗り越え、野営訓練の小隊長を続けることができました。幹部候補生学校においては、先のことにどれだけ不安を抱えていたとしても、必ずサポートしてくれる人が傍にいます。そのため、何事においてもまず、積極性をもってやってみるということができます。

一方で、私も助けられてばかりではなく、今までに実施してきた徒歩行進訓練においては、いつも同期に荷物を持ってもらっている立場でしたが、大野原訓練での30km徒歩行進訓練では、私が同期の荷物を持ち、区隊全員が完歩することに貢献できました。同期一丸となり、助け・助けられ、日々成長していることを実感できた場面でした。



高良山登山走激走中

以上2点が、私が特に幹部候補生学校で学ぶことができた点です。最後に、来年以降、幹部候補生学校に入校するであろう防衛大学校の皆様、62期の一卒業生として、一言記させて頂きます。それは、"幹部候補生学校は、確実に自分を精神的にも、肉体的にも強くしてくれる"ということです。特に4学年の皆様は、来年に控えているであろう幹部候補生学校での生活に多大なる不安を抱えているかもしれません。

しかしながら、幹部候補生学校は、自分がどれだけ精神的に、肉体的に弱かったとしても、絶対に見捨てることはありません。必ず自分達は成長することができます。けれども、これらの事は、自分から積極的に動かなくは意味がありません。そのためには、あらゆる事に全力で臨む必要があります。皆様も、今後幹部自衛官になるにあたり、常に積極性をもって物事に臨むことが非常に重要です。私の寄稿させて頂いた内容で、皆様に何かひとつでも得るものがあれば幸いです。



全員"笑顔"で頑張ってます。

◇第6 2期生に聞く（その2）

2018. 12. 5

「後輩に伝えたいこと」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第4候補生隊第5区隊

一般幹部候補生 陸曹長 笹島 宏青



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第99期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程に入校中の防衛大学校本科第6 2期卒業生、笹島宏青候補生です。

私たちは、3月28日に期待と不安を胸に幹部候補生学校の門をくぐってから早くも半年が過ぎました。幹部候補生学校での生活は、防衛大学校での生活とは異なる点が多くあります。幹部候補生学校では上級生や下級生という関係はなく、同期のみで同じ目標に向かって励まし、助け合い、時には衝突しあいながら切磋琢磨していくことで、同期間の絆をよりいっそう深めています。

また、小部隊指揮官として必要な知識及び技能に重点を置いており、日々学ぶことが部隊勤務に直結していることを実感することができます。実員指揮を重した戦闘・戦技訓練に加え、戦術や戦史、防衛教育といった幹部として必要な識能教育、伝統ある高良山登山走、藤山武装障害走などの体育訓練を行っており、それらを通じて幹部自衛官としての必要な資質を涵養することが求められています。こうした幹部候補生学校での訓練や教育を受けながら生活してきた中で後輩に伝えたいことを述べさせていただきます。1点目は「同期の絆」について、2点目は「失敗を恐れず積極的に行動」という点、3点目は「指揮官の理想像」についてです。

まず、1点目の「同期の絆」についてです。50km行進や総合訓練といった自身の限界に挑戦する過酷な訓練、高良山登山走検定や藤山武装障害走検定における各種競技会において区隊優勝に向けての厳しい練成を行う中で支えとなり、励ましてくれるのは同期です。

私はここでの教育の中で一人の力の無力さと同期と共に協力すれば大きなことを成し遂げられることを学びました。時には意見の違いでぶつかり合うこともあります。尊敬すべき同期も数多くいて、同期と共に過ごすことで自分を見つめ直すこともできます。自分がつらく苦しいときでも、周りの同期のために自分を犠牲にして行動する人は一目置かれ信頼されます。同期の絆は卒業後も弱まることのない強く強固な絆です。防衛大学校に入校中から同期の大切さに気づいて

ほしいと思います。幹部候補生学校では、防衛大学校での同期に加え、一般大学卒の候補生も共に教育を受けます。一般大学卒の候補生達は、私たちが防衛大学校ではできないようなことを多く経験しています。そんな彼らと共に教育を受けることで、違った視点から物事を見るようになり、良い刺激を与えてくれます。



作戦を説明中

2点目は「失敗を恐れず積極的に行動」についてです。私たちは、防衛大学校を卒業して幹部候補生学校に入り、慣れていた環境が一転して変わりました。今までとは違った動作や規律が多々あり、戸惑うことも多くありました。しかし日々、間違わないように、失敗しないように消極的に行動してはいつまでもできるようにはなりません。幹部候補生の間はいくら失敗しても構いません。失敗しそれを反省して部隊勤務に活かせれば、その失敗は意味あるものになっていきます。わからない時やできない時は、同期や教官が親身になって教えてくれる組織です。失敗を恐れず積極的に行動してみてください。

3点目は「指揮官の理想像」についてです。私が防衛大学校を卒業したときには具体的な理想像ははっきりしていませんでした。しかし、幹部候補生学校で生活し、各係業務や三役勤務等の日々の修学に取り込んでいくうちに、自ら行動し、背中で見せて率先垂範していくことが重要だと感じました。私たちは近い将来必ず部下を持ち、初級幹部として小部隊の指揮官になります。幹部候補生学校では初級幹部としての職務を遂行するために必要な知識や技能を修得するためにカリキュラムが抜かりなく組まれていて、卒業時には必要な教育を一通り終えたこととなります。

しかし、この教育をただこなすだけでは指揮官に必要な資質を身につけることはできません。ここで大切なことは自分が将来どのような指揮官になりたいかという具体的な理想像を考えながら日々の生活を過ごすことです。考えながら過ごすことで、卒業時または初級幹部時に考えていない人と大きな差になります。今のうちから考えてみてください。

最後に、幹部候補生学校には訓練や練成、日々の生活から幹部自衛官になるため必要な資質や識能を涵養させることができる環境が整っています。しかし、この環境を活かすことができるか、または無駄に過ごすかは自分次第です。活かすためには自ら考え行動することが欠かせません。防衛大学校では、校友会活動、各種競技会、学生舎生活での勤務など自主自律を実践できる環境が整っています。今のうちからそのような環境を利用し、考えて過ごす習慣を身につけることをして欲しいと思います。少しでも私の投稿がお役に立てれば幸いです。



戦闘訓練的一幕

◇第6 2期生に聞く（その3）

2018. 12. 5

「芯のある幹部自衛官を目指して"仲間と共に"」

海上自衛隊幹部候補生学校

第1学生隊第5区隊

一般幹部候補生 海曹長 石橋 英和



立派な幹部自衛官になることを目標に、江田島の門をくぐってから半年が経った。つい先日まで、学校の中庭にある「同期の桜」は枝いっぱいの淡い花を身にまとっていたのに、今はもう葉を枯らしており季節の流れを感じさせる。古鷹山登山、遠泳、遠漕競技など多くの行事がここまで行われてきたが、どれも内容が濃いものばかりで非常に充実したものであった。

また、7月に発生した「西日本豪雨」では災害派遣の命を受け、国のため、人のために尽くすという自衛官の任務の崇高さを身をもって感じる事ができた。これ程にも早い段階でこのような貴重な経験をさせていただけるとは思ってもいなかったのが非常に驚いたが、思い返してみると今後の自衛官人生の基礎を形成しようとしている我々にとっては、成長の糧となるまたとない機会であったと確信している。

この他にも私は前期、防衛大学校卒と一般大学卒の約200名をまとめる学生長の職を拝命し、多くの学生の指揮を執る機会をいただいた。入校当初は右も左も分からず、何をすることが正解なのかも分からず、模索する日々が続いた。求められる能力は高く、気持ちは何度も折れそうになった。

しかし、その度に防衛大学校の同期や幹部候補生学校で新たに出会った一般大学卒の同期たちが傍で私を支えてくれ、数々の困難を乗り越えることができた。「同期」という言葉の重みをいつの間にか忘れてしまっていた私に、改めてその重さを気づかせてくれた貴重な機会であった。併せて、些細なことであっても本当に困っている人間にとって、自分の困難に気づいて声をかけてくれることがどれほど有難く、心温まるものであるかを学ぶことができた。これは自衛隊だけでなく、一般社会にも通ずるものでもあると思うので、誰に対しても困っているようであれば積極的に声をかけ、細かな気の配れる人間になれるよう努力していきたい。

防衛大学校在学時、私にとって一般大出身者は「ライバル」といった印象を強く持っていた。諸先輩方から、一般大出身者の物事の飲み込みがとても早いことは聞いており、防衛大学校卒として絶対に負けてはならない競争相手であると考えてしまっていた。今思えば、非常に情けなく狭い物の考え方であると猛省して

いるのだが、当時の私は目前に迫る新たな環境を不安視してばかりで、広い視野で物事を捉えることができなくなっていたのだ。

しかし、実際に生活を始めてみると、私のなかで一般大出身者は「単なるライバル」から「ライバルかつ、先生」へと変わった。彼らの物事の見方は非常にユニークかつ合理的で、良くも悪くも凝り固まった私の頭に大きな衝撃を与えてくれた。

また、彼らはそれぞれが多様な人生経験を併せ持っており、防衛大学校では経験することができないようなことを経験談として私に教えてくれる。この経験談を通じて、自分自身の人間としての視野が広がっていくことが実感でき、スタディガイド（幹部候補生学校における教科書のこと）では学ぶことができないような内容に数多く触れることができた。今でも一般大出身者にはとても感謝していると同時に、これからも多くの事を教えてもらえれば、と思っている。今度は私が自身の持っている経験や、微々たるものではあるが術科などの技術を少しでもいいので彼らに教えてあげられるように努めていかなければならないと考えている。

ここ江田島で学ぶことができる期間は、残すところ半年を切った。ここまでやってこられたことに対する安堵の気持ちがある一方で、これから待ち受ける遠洋練習航海に対する焦りの気持ちが入り混じっていることも事実である。残された時間で、術科や教務等少しでも多くの事を吸収して「自分は全力を尽くした」と、胸を張ってここを巣立てるように今後も日々の生活を全力で過ごしていきたい。また、同期と共にじっくりと過ごすことができる時間も終わりが見えている。多くの同期と時間を共にし、深い思い出を沢山作りたいと思っている。

最後に防衛大学校で学ぶ後輩諸官に一言。私達は一足先に遠洋航海、そして部隊へ行く。将来、皆さんと一緒に働けることを楽しみにしていると同時に、自分達の後を追ってきてくれる存在がいることを大変心強く思っている。皆さんに少しでも立派な姿を見せることができるよう、私達も精一杯努力していく所存である。江田島での生活はきっと君たちが思っている以上に魅力的で、奥の深いものである。どうか食わず嫌いせず、まずはこの環境へと飛び込んできて欲しい。「どんな幹部になりたいか」、「自分がこの組織で何がしたいか」等、どんなことでもいい。大なり小なり目標を持って、江田島へ来てもらいたい。

いつの日か、部隊で会えるその日まで、お互いに頑張ろう。

◇第62期生に聞く（その3）

2018.12.5

「挑戦 "後輩たちへのメッセージ"」

航空自衛隊幹部候補生学校

第1中隊第1区隊

一般幹部候補生 空曹長 西村 汰祐



全国の諸先輩方及び同期生の諸官におかれましては、ご多忙の中、日々の任務にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

航空自衛隊幹部候補生第108期一般幹部候補生防大課程に入校中の防衛大学校第62期卒業生を代表し、西村候補生がご挨拶申し上げます。

3月18日に防衛大学校を卒業し、幹部候補生学校に入校してから半年が経過しました。防衛大学校を卒業したのも束の間、10月19日にはここ奈良の地も卒業することとなり、一日一日を大切に日々同期とともに、研鑽しております。現在、幹部候補生学校において我々は「自ら考え、判断し、行動する航空士官の育成」という教育理念に基づき、区隊長をはじめとする基幹隊員の熱意ある指導のもと幹部自衛官としての資質を涵養しております。

今回、「小原台だより」に寄稿するに当たり、「私が幹部候補生学校で学んだこと及び部隊で勤務するにあたりその意気込み」及び「防衛大学校の後輩諸官への一言」について述べさせていただきます。

まず、私が幹部候補生学校で学んだこととは、目的をよく理解し行動することです。「目的」つまり何のためにやっているのかを理解し行動することは、本質を捉えて行動することにつながると学びました。防衛大学校在学時を振り返ると要領の良さで乗り越えてきた部分が多くあったように感じます。しかし、今後、部隊で勤務するにあたり、要領の良さのみでは決して乗り越えられない任務があると考えます。

部隊においても一生懸命、各種任務に取り組み、幹部候補生学校の教育理念である「自ら考え、判断し、行動する」ということを継続的に実践していく所存であります。

また、9月中旬、108期B課程は昨年度から実施されているエアマンシップ・トレーニングという訓練を受けました。エアマンシップ・トレーニングは幹部候補生学校における集大成という位置づけの訓練であり、奈良基地内ではなく、静浜基地及び防府北基地にて、操縦者勤務実習、小隊長等勤務実習及び不測事態対処実習を通じ、航空自衛隊の幹部自衛官として歩んでいくための資を得ることが

できました。常続不断の状況把握、迅速な判断及び各種事態に対する事前準備等の重要性を学ぶことができました。そして、操縦者勤務、小隊長勤務及び不測事態対処に共通していることは、「目的を理解し、任務を遂行する」ということであると感じました。自分の任務は何か、そして、どのように行動すべきかを常に意識することの大切さを学びました。

幹部候補生学校を卒業すれば、困難を共に乗り越えてきた同期とも離れ、それぞれが全国各地の部隊で勤務することになります。幹部自衛官として、より困難な問題に直面し、対処していく機会が多くなります。現時点では、エアマンシップとは何か、航空自衛隊魂とは何かを自分の中で明確に確立させることはできていませんが、今後の部隊での勤務を通じて体得していきたいと考えております。



銃剣道の訓練風景

次に、防衛大学校の後輩たちに伝えたいことは、同期を大切にすることです。自分が困難に直面した時、いつも支えてをくれるのは同期です。そして、同期が悩んでいるときは積極的に手を差し伸べて下さい。同期で支え合って、校友会活動、勉学及び学生舎生活等に邁進して下さい。そして、防衛大学校に在学している時にしかできないことに全力で取り組んで下さい。学生舎生活、校友会、4学年については卒業研究等やるべきことは多いですが、全力で取り組み、後悔の残らないように打ち込んでみて下さい。

しかしながら、全力で取り組んでも、「もっとこうすればよかった」「まだまだやれた」等の悔いが残ると思います。恥ずかしながら、私自身、防衛大学校時代の後悔は多々あります。その思いを胸に幹部候補生学校において、改めて新しいことに挑戦して行って下さい。そうすることで、より充実した幹部候補生としての

課程生活を送ることができると思います。

私たち62期は、一足先に部隊に行きます。私たち62期一同は、後輩諸官と共に勤務できる日を楽しみにしています。防衛大学校での生活を無駄にするか否かは自分次第です。防衛大学校での生活は一生に一度きりであり、二度と戻ってくることはありません。一日一日を大切に生きていきましょう。そして次会うときにお互い恥ずかしくないよう、共に自分を磨き上げていきましょう。



桜の下で同期と共に

◇今人生、男盛り（第24期生）（その1）

「ハイチ ―男盛りの一人旅―」

陸24期 佐藤 正紀



国連を退官して2年目の去年、私は大変有意義な経験をさせてもらった。

退職後、多くの皆様と同様に、自分の生き方をどうすればいいのか悩んだ。結局、私の住んできた地域に何かお返しをしようということで落ち着いた。そこで、地域のロータリークラブでどんな活動をしているのか見てみることにした。知り合いのヨット仲間の推薦でビジネスを持っていない私でも快く入会させて頂いた。そこで、ハイチで小さな学校を支援しているクラブメンバーの一人に出会うことができた。去年、彼のグループの一員として、ハイチでボランティア活動をさせてもらった。

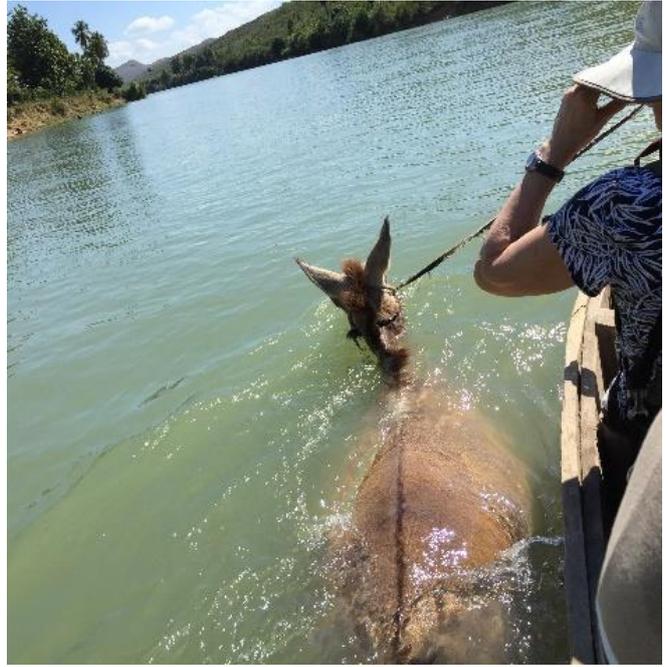
参加する前は、一般市民によるボランティア活動に懐疑心をもっていた。ただお金をばらまき、一時的な喜びに満足し、住民を開発依存症にさせているのではないかと疑っていたからだ。

在職中、アジア・中東の人事担当のため、直接ハイチに行く機会はなかった。しかし、皆様をご存知のように、日本は自衛隊の施設部隊をこれまでにない早さでハイチに派遣した。そんな施設部隊の活躍を政治部の同僚からよく聞かされたものだ。通常であれば、このような自衛隊の派遣に日本政府は、何か月もの時間を要した。国連から見ている私にとり、日本政府の優柔不断な対応を齒がゆく感じたことが幾つもあった。同期生の番匠君がニューヨークを来訪した際に、ハイチへの電撃的な部隊の派遣に、多くの同期生が関与した経緯などを聞き、私は素直に嬉しかったし、同期を誇りに思った。そんなこともあり、私はハイチに興味を持つようになっていた。

私のハイチへの興味は、もう一つの理由があった。2010年のハイチの地震で、国連が借用したビルが崩壊した。国連で一緒に働いていた元上司、同僚、現地職員、部隊隊員ら、100名近くの平和維持活動関係者たちがこのビルの下敷きになり命を落した。亡くなった上司、同僚の顔を思い浮かべながら私は、現地で冥福を祈りたかった。



ハイチ地震でのビル崩壊



ロバと一緒にアンチボネ川を渡る

さらに、国連が関与したコレラである。地震が起こった同年、私が渡河したアンチボネ川の流域を中心にコレラが発生し、一万ものハイチの人達が、コレラで亡くなった。コレラの原因は、アンチボネ川の上流に駐留していたネパール部隊の隊員から出たらしい。現地の下請け業者が、部隊の排せつ物を処理せず、そのまま川に流したのが原因のようだ。残念なことに、国連は、つい数年前までその過失を認めようとしなかった。

ポート・オ・プリンスから、途中で一泊しながら車で下車地点まで移動した。道路は穴だらけでそれを避けるたびに激しく揺られ気分が悪くなった。そこからは、学校の文房具などをロバの背中に積み、自分の足で歩き、今にも沈みかけそうな木船に乗り、ロバと一緒にアンチボネ川を渡った。着いた所は、電気も水道もないハイチの小さな農村であった。

先般、地元の大学でハイチ国連平和活動（MINUSTAH）について講演させてもらった。その聴講者の中にハイチ出身の学生が数人いた。それらの学生のほとんどは、MINUSTAH を評価していなかった。

この旅行で私が、思ったことは複雑で言葉にすることは難しい。比較するかのようには MINUSTAH の事を書いたつもりはない。ただ単に、ロータリークラブで知り合った友人たちの奉仕活動がまぶしく見え、羨ましかった。その反面、国連本部で私を厳しく指導してくれた元上司、いつもにこやかに接してくれた同僚がハイチで命を落としたことは途方もない究極の貢献である。しかし、ハイチの人々から彼らの努力が忘れ去られようとする現実を見てやり切れない思いである。せめて、コレラの過失を即座に認めていれば、状況は少し変わったかもしれない。

それが残念でならない。

国連は、これまで数多くの平和維持活動を立ち上げてきた。成功の基準をどこに置くかでいろいろ評価が分かれるが、おおむね多くのオペレーションで成功してきたと私は確信している。特に自身が参加したナミビア独立支援グループやカンボジア暫定統治機構は、誇りに思っている。これからも元上司、同僚の志を絶やさないためにも、機会があるごとに国連の平和維持活動をより多くの人に伝えていきたいと考えている。



ボランティアグループが造った井戸に集まる村の人々



ボランティア仲間

◇今人生、男盛り（第24期生）（その2）

「感謝 一念」

海24期 槻木 新二



目下、私の心境を表す言葉は、「感謝一念」である。

<自衛官を退官して>

1980年3月防衛大学校卒業後、海上自衛官として約35年間奉職、2014年12月退官した。その翌年、開校40周年を迎えた海上自衛隊第4術科学校（舞鶴）の校長から記念講演の依頼を受けた。

期待に応えられるか不安であったが、後輩校長からの依頼とあっては無碍にもできず、恩返しと思い引き受けた。講演の対象は、学校職員及び学生、幹部自衛官から曹士自衛官・事務官等、年齢も階級も経歴も様々で、どこに焦点を絞って話すべきかテーマに窮したが、結局「一先輩の思い ～よりよい勤務をするために～」と題して実施した。

それは、当時の心境を自然体で素直に伝えたいという思いからであった。講演の冒頭で私は、「制服を脱ぐ時に、三つの感謝の気持ち ①自分に多くの経験と成長の機会を与えてくれた組織への感謝の気持ち ②自分を導きあるいは支えてくれた先輩・部下・同僚に対する感謝の気持ち ③最も身近で自分を支えてくれた家族等への感謝の気持ちが自然と湧いてくれば、総じて良い勤務、充実した勤務であったと言ってよい。」と述べた。

そして、最終的にそのような気持ちを感じるために、「①分を尽くす ②“いい人”に巡り合う ③勤務上のバランス、心のバランスを大切にする ④健全なものの見方・考え方を持つ」ことの大切さを強調した。なお、この講演は、新たなステージに身を転じた私にとっても、「己の分を知り、分を尽くす」という生き方を改めて自分自身に言い聞かせるよい機会となった。

<会社経営に携わって>

新たなステージは、正に天の計らいとしか言いようがない。自衛官退官後、2年余を経過した2017年4月からあるグループ会社の子会社（従業員557名。2017年度末現在）の代表取締役役に就任した。一転して、民間会社の第一線に

身を置くこととなった。重責と会社運営の厳しさを実感しつつも、充実した日々を送っている。社長就任にあたり、「社長とはいかにあるべきか」を、まずもって自問し、いくつかの指南書も当然ながら読んでみた。しかし、自らの経歴を考えた時、必ずしもじっくりいくものではなかった。社長就任期間中は自問が続くことは間違いない。

社長就任にあたって、私は、細かいことは抜きにして、「①目的にベクトルを合わせる。②健全な職場づくり。」の2点は、会社経営の土台と信じていることを社員に伝えた。社長就任1年目は何とか切り抜けたが、目下2年目にあって経営目標を達成すべく、会社一丸となって奮闘している。されど事業環境はなかなか厳しいものがある。また、グループ会社の一員として、次期中期経営計画（2019年～2021年の3か年計画）の成長戦略を描き、果敢に挑戦していかなければならない立ち位置にあるが、社員個人の成長や幸せと会社の成長が乖離しないことが大事であり、引き続き「目的にベクトルを合わせる。健全な職場づくり。」に意を用いていきたいと思っている。

新米社長とは言え、自らを信じ、自らの考えを持って臨むことが大切であり、その考え方の軸となるのは、何といたっても永年の自衛隊での経験そのものである。また、自らが精神的安定を保つことは大切であり、その精神安定剤は、目下、家族の支え、信友との交わり、座右の書（森信三、中村天風、平澤興などの書）等となっている。いずれにしても、「人生二度なし」と考えた時、自衛隊とは全く異なる民間会社の経営に従事し、社員とともに社会貢献できることは、この上ない喜びであり、感謝一念である。

<病気をして>

私も還暦を過ぎた。現役自衛官の時に誇った体力も少しずつ「ガタ」が来ていた。退官数年前から体の変調を感じるが多かったが、その変調に正面から向き合うことなく放置状態であった。そんな私の態度を心配した妻から一押しならず二押しを受けて、会社規定の人間ドックを受けた際、医師との問診で、気になっていた体の変調について相談した。

当該医師の見立てで即座に別の専門医師との問診、採血が実施された。後日、血液検査の結果から成長ホルモン分泌過剰の可能性大ということで、専門病院での検査入院となり、成長ホルモン産生下垂体腺腫による病気と判明した。このまま放置すれば、将来いろんな合併症を引き起こすため、本寄稿期限直前に主治医の薦めにより手術治療を受けた。

入院期間2週間、その後数日間の自宅療養をとり、ほぼ健康体に回復した。此度の手術・入院は、私にとってこれまでにない大きな病気であった。手術当日及び翌日の二晩はICUで寝たきり状態、各種の治療具が装着され、2時間ごとの各種測定を受け、眠ることもままならず、何もできない無力な自分と向き合っていた。わずか二晩とは言え、この間の看護師の温かい言葉に触れ献身的な看護に

大いに励まされ、感謝の気持ちで一杯となった。また、入院期間中、日々少しずつ「普通」の体に近づいていく過程で些細な変化に喜びを感じた。此度、主治医からは病状の早い段階で治療できたことは幸いである旨の話があった。これも「妻の後押し」や人間ドックで居合わせた専門医師の存在など、顧みると幸運を感じる。これからの晩年期の土台となる健康を整える最高の機会となったことは間違い。感謝一念である。

<晩年期に向けて>

「人生100年時代」と言われる昨今である。人生100年は難しいとしても男性平均寿命81歳に照らしても残り20年ある。しかし、これからの20年間は、人生の晩年期であり「下り坂」である。

自衛官退官までのいわゆる「上り坂」人生とは、明らかに歩み方が変わるのは当然である。目下、幸いにして、民間会社の第一線に身を置き、気持ちは、自衛官現役当時と同程度の心構えで臨んでいるが、この役職の期間は短いものである。その後は、正に肩書無しの一人間として、アイデンティティを失うことなく、自分らしい目標を定め「下り坂」を着実に歩んで行きたいものである。

その際、心に響くのは、次の言葉である。「人は退職後の生き方こそ、その人の真価だといってよい。退職後は、在職中の三倍ないし五倍の緊張をもって、晩年の人生と取り組まねばならぬ。(森信三先生「一日一語」)」

晩年期に向けて、「一切の事柄をすべて感謝に振りかえて」自分の道を歩んで行きたいと思っているこの頃である。 感謝一念！

◇今人生、男盛り（第24期生）（その3）

「指揮官として自分がしてきたこと
～部隊、隊員をいかに元気にするか～」

空 24 期 杉山 良行



平成 29 年 12 月、現役を引退し今は防衛部門を持つ会社に再就職をしている。今回、防大同窓会 HP に「今人生、男盛り」との内容で寄稿を依頼された。「男盛り」などほど遠い身であることは自覚しているので何を書くか悩んだが、副題/内容は自由とのことであったので自らの生涯のテーマと考えている「リーダーシップ」について、特に現役の時代、自分が指揮官としてどういう考えで何をしてきたか、を後輩に伝えたいと考えた。

航空自衛隊（以下、「空自」）の後輩指揮官を見ていて有能な指揮官が多いことについて頼もしく思う。が、同時に自分を中核として部隊に一体感を与え、隊員のやる気を引き出している指揮官は少ないと感じている。航空自衛隊の更なる発展を考える時、隊員の士気高く部隊が一丸となって任務に邁進するよう指揮官が努力することは必須であると思う。この点、自分が指揮を執った部隊、基地は間違いなく隊員が元気でやる気を出し、活気のある職場となったということに自信がある。指揮は個性/パーソナリティにより千差万別であるのであくまで「自分はこれで上手くいった」に過ぎないが、防大生、卒業生/指揮統率に悩む後輩たちの参考になれば、と思って本稿を書く。ただし、全部を書こうとすると本稿では収まらないので自分の指揮統率が凝縮されている南西航空混成団司令（現南西航空方面隊司令官、以下「南混団司令」）の時のことを中心に記述し、別の指揮官として経験し参考にした事例を書き加えることとする。

まず自分が部隊指揮をする基本として隊員をして「空自に入ってよかった」、「この基地で勤務できることが嬉しい」、「この職場が好きだ」と思わせる、言葉を換えると隊員に「幸せを与える」ことを目指してきた。当然の事として部隊指揮の大前提は「任務の完遂」であるが、これだけではつまらないと自分は考えていた。

南混団司令に着任したのは平成 24 年 12 月である。この時期は同年 9 月に日本政府が尖閣国有化を宣言し東シナ海での中国の航空活動が劇的に活発化、どこまでエスカレーションするのか部隊は経験したことのない緊張感の中で任務を

遂行していた。着任した私の示した指導方針は「部隊一丸」、部隊が置かれた厳しい環境の中、団結力を強め難局を乗り切ろうということであり、それを実現するために小項目として①自分の役割を果たせ②前向きに③明るく④仲間を大切にすることを示した。それぞれ小項目を説明すると

① 自分の役割を果たせ

まず「一人前の仕事＝業務＋チームの中の役割を果たす」という考えを徹底した。単なる業務だけをすればいいのではない、自衛隊は常に「チームで働く」中で、「チームの中での役割を果たさない、あるいはチームワークを乱すやつは仲間とは認めない」ことも明言し、特に「故意の事故」や「犯罪」などは「チームワークを乱す」最たるものであり絶対に許さないという共通意識を持つよう促した。

「チームの中での役割」は各自で違う。幹部と准曹士／先輩と後輩／前任と後任／アクターと応援団、などいろいろな切り口があるが自分の役割を考え見だしチームに参画、貢献することを要望した。この「役割」という中で「准曹士組織の重視」ということを打ち出した。

准曹士は部隊の中での大多数であり在隊期間が長く部隊の重心であり、部隊の伝統や文化はその集団に宿る。その観点から、あくまで指揮官の権限の中ではあるが「自立して健全性を維持できる准曹士組織」を作ることが安定した良い部隊作りに繋がると考え、それを実現するためには上級空曹が中堅空曹を、中堅空曹が初級空曹や空士を育てるという後輩育成の好循環を作りたいと考えた。

蛇足ながらこれは南混団司令の前に勤務した開発実験集団司令官時代、同集団では新任2曹の集合教育を上級空曹たちが交代で計画、実行することで上級空曹の意識向上に実績を上げているのを目の当たりにして参考にさせてもらった。「上級空曹は准曹士の中の指導者たちであり、准曹士前任は上級空曹の中のリーダーである」、こうした考えを普及し定着させるために「上級空曹集合訓練」を新設し「准曹士前任制度」の改善を行った。「准曹士前任制度」の改善では従来、同列に扱われていた「服務指導」と「部隊間交流」のうち「服務指導」が上位にあることを明確化した。現在、この二つの施策は空自全体で継続して行われていて成果を得ていると認識している。

② 前向きに

時代は「不作為の罪を許さない」。何が起きるかわからない南混団のおかれた情勢の中、「倒れるなら前に倒れろ」、「空振り三振は OK だが見逃し三振は NG」、「空振り三振した者は見捨てない」、ことを繰り返し強調し徹底した。部下たちはよくこれに応えてくれたと思う。

③ 明るく

明るい部隊は運も味方する。明るさ、は言葉を変えると風通しの良さであり、「言うべきことが言える」、それを「聞いてもらえる」ことだと思う。聞いてもらえることが認知欲を満たし、不平不満のない明るさを作り出す。また日常的に不足事態対処を旨とする運用部隊では「気が付いた者が口にする」「気になったら口にする」ことが重要であり、日頃から風通しの良さを心がけることが重要である。このことは指揮官職として初めて勤務した飛行隊長以後、指揮官としての経験の中で定着した考えである。

③ 仲間を大切にす

仲間を大切にす、これはチームワークの基本であるが、私は更に上を目指して欲しい、と要望した。どういうことかと言うと「いいチームになりいい仲間になるほど仲間が痛い目にあうことを辛く思う」ようになるが、裏返すと「自分の痛み(事故、失敗、自殺など)はいい仲間をつらくさせる」ことになる。このことに思いを致し、「仲間を大切にす」ことは「自分を大切にす」ということを自覚し、実践することを求めた。また小集団活動を奨励した。「部隊の大変な時に小集団活動か」と思われる向きもあるかと思うが、だからこそこの小集団活動である。「部隊一丸」となるために「はみ出す者を作らない」、指揮官としての「掌握」という観点からである。

同時に指揮官には自ら何らかの小集団活動に参加するよう厳命した。奨励だけして自分がしないのでは隊員は本気にならない。ちなみに自分の小集団活動は「フットサル」、「仲間といい酒を飲み語らう」、「ニックネームで呼び合う」であり、これは平成 17 年、松島基地司令時代から引退するまで変わらなかった。「ニックネームで呼び合う」は副指揮官、副官室はもちろん、司令部や隷下部隊でも希望者には参加してもらったが仲間意識を育てるのには大変効果的である。また脱線して恐縮だが松島基地司令の時代、自らのフットサルという小集団活動に基地全体を巻き込んだ。所在隊も含め、大きな所在隊は単独で、小さな所在隊は自分所属の司令部チームに加わってもらい、大会を実施した。なぜフットサルだったか？少人数でできること、狭い場所でもできること、冬の厳しい松島基地でも室内でできることなど利点が沢山あったが、一番の理由は自分がサッカー好きで得意だったからだ。この点、若い後輩たちには今やっているスポーツや趣味は是非とも続けることを進める(この時に限らずサッカーが私の自衛官人生において与えてくれたものは自分にとって限りなく大きい)。フットサルという共通の話題ができて今までなかった人のつながりが沢山生まれた。

数の少ない女子隊員の団結意識を育てるために希望者による部隊横断的な女子チームを作り、大会に参加させた。(ちなみに女子チームは松島に続き人間、那覇で立ち上げたがそれぞれ全自衛隊女子フットサル大会に出場するなど

活発な活動が続いている。またそこから転勤した女子隊員が転出先でチームを立ち上げるなど普及効果は非常に大きかった)女子チームの出現は男子隊員たちを更にその気にさせたように思えた。松島基地の所在する東松島市は小さな町だが週末、町の居酒屋などに行くとなまたま行き合わせた隊員同士で話ができるようになった。基地全体がその気になってくれて基地全体の一体感が育った。副次効果として業務事故/サービス事故が基地レベルで減った。なぜ事故が減ったのか、ない理由を証明するのは難しいが当時の結論は「事故を起こして仲間たちに迷惑をかけられない」という意識が生まれたことではないか、と結論づけた。小集団活動が持つ効果といかに指揮官の影響力が隊員の元気につながるか、を思い知った基地司令の時代であり、自分自身の指揮を確立していく大きな転機となった。

以上が、南混団司令としての指導方針であり、現役の後輩から「司令官の指導事項、自分の指導事項として使わせてもらっています」という声を聴くと大変に嬉しい。が、指導方針の内容とともに本当に大事だったのは「伝える努力を本気でした」ということである。

どんなにいいことを思い考えても伝わらなければ思っていないのと同じ、考えていないのと同じ」であり指揮官にとってコミュニケーション能力が一番大事だと思う所以である。指導方針は南混団司令以降、総隊司令官、空幕長の時代も変えずに一貫して視察の際に部隊に話をして回った。南混団は総員 3000 人程度の小さな方面隊だが大多数が私の指導方針を直接聞いている。

総隊司令官の時も空幕長の時も部隊視察では同じ話をした。空自の一般的な視察は状況報告/施設巡視/主要幹部との昼食会/訓示/主要幹部との夕食会、というものだと思うが自分の場合は壇上からの訓示の代わりに訓話(全体 40 分、幹部 20 分、准曹士 20 分)と体育訓練としてフットサルを行い、夕食会は隊員たちとの懇親会とした。一般的に行われる壇上からの訓示をしなかったのはそれでは自分の考えが隊員に浸透しないと思ったからであり、訓話の形で十分な時間を使い指導事項を直接隊員に説明し自分の意図を伝えた。またフットサル/懇親会は自分の小集団活動をみんなに実践して見せることに目的があり訓話の中でもそれを伝えた。隊員には「親分(司令官)は本気で小集団活動を重視している」ということが伝わったと思う。また指揮官である自分と准曹士先任とで「同じことを言う」ことにも心がけた。これには日常的に意見交換、情報共有をしておくことが必要で必ず少なくとも週一回は 1 時間ほど時間をとって准曹士先任と話をした。「同じ事を言う」、このことは「親分と先任は一枚岩だ」ということを隷下部隊、隊員に認識させ先任に対する尊敬の念、信頼を高めるのに絶大な効果があったと思う。また指導事項とは直接関係ないが部下のシニアリーダーには特別な配慮をした。通常、シニアリーダーには相談相手がいなくて孤独であるが、そ

のメンターに自分になるということである。特に本人の評判、評価を伝え指導する—いい評判だけでなく好ましくない評判も—ことに力を注いだ。好ましくない評判をまわりは知っているのに本人だけが知らない、ということが間々起きる。それは本人にとっても部隊にとっても不幸なことだ。結果、本人には改善すべきことが伝わり部隊運営に好結果を残したと思う。また部下指揮官との信頼関係醸成にも大きな効果があった。

大変長い話になった。しかし全然語りつくせていないというのが実感である。読んでくれた後輩には何らかの参考になれば、と思う。また「興味がある」と思う指揮官には連絡をもらえれば個人的な相談にも乗るし、部隊で話をしてもいいと思う。後輩の役に立ちたい、その一心である。

■活動報告

◇第6期ホーム・カミングデー2（HCD2）

2018. 5. 7

ホーム・カミング・デー2（以下「HCD2」）は、國分防衛大学校長の発意により入校式に同窓生を招待する行事で、平成28年から始められ、今年で第3回目を迎えました（第1回は第1期生から第4期生、第2回は5期生）。

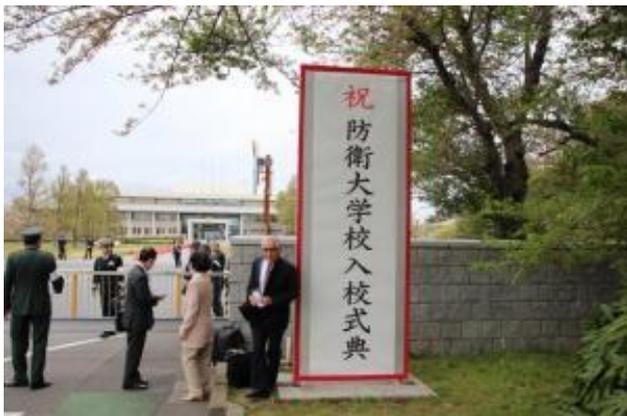
今回の本科第66期生等の入校式には第6期生が招待され、第6期生会員及びご家族、190名が小原台の若人の城に集われました。

4月5日（木）の入校式当日は、前日までとは打って変わり肌寒い一日でしたが、第6期生の役員の方や防大防衛学教育学群の教授・准教授（制服自衛官）の周到的準備の下、7時40分（予定は8時）の開門と同時に整齊と案内・誘導が実施され、HCD2参加者は、今年もHCD2参加者のために設けられた正門右側の専用入り口を通過し、スムーズに入門されました。

正門前にバスやタクシーで到着されたHCD2参加者は、案内係の同期生の顔を見つけては懐かしそうに声をかけあい、立派になっている本館を見上げ、感心される場面もありました。

防衛学館において陸・海・空の要員ごとに受付を済ませた参加者は、待機室にて久しぶりに再会したご同期や奥様方と思い出話や近況報告に花を咲かせ、役員からの今後の行動予定や注意事項の説明を熱心に聞き入っていました。

参加者は、入校式参列に先立ち、記念講堂前階段にて國分学校長、武藤副校長、香月副校長（防大23期）、並びに上尾幹事(防大29期)を交え、第6期生全員と陸・海・空別に記念写真の撮影を行いました。



入校式当日の防大正門前



控室での懇談状況



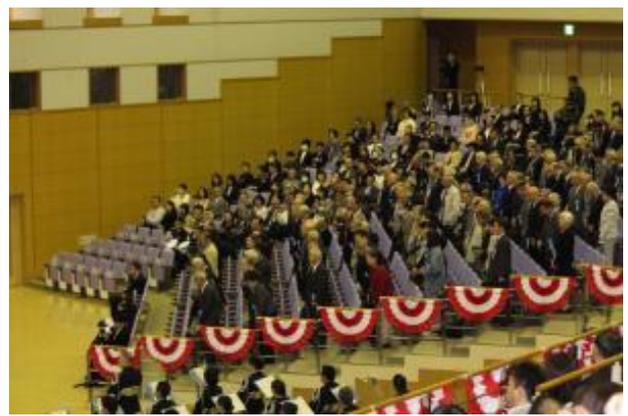
國分学校長を囲んでの6期生参加者全員の記念撮影

入校式会場には、防衛大学校のご配慮により、第66期本科学学生及び留学生並びに研究科課程入校者を見渡す会場右側にHCD2参加者全員の席が用意されており、第6期生の方々は60年前の自分たちの姿と重ねて懐かしそうに見られていました。

入校式は、10時に山本ともひろ防衛副大臣が臨場し、防衛大学校儀仗隊による栄誉礼で始まり、国歌斉唱、任命・宣誓・申告に続いて学校長式辞、防衛副大臣訓示、そして本松統合幕僚副長（防大29期）による来賓代表祝辞と、滞りなく進められました。



國分学校長の式辞



会場全体からの
拍手に応える6期生

國分学校長の式辞では、副大臣をはじめ来賓の方々やご家族に参加のお礼を述べられた後、「60年前に入校された第6期生の大先輩の方々が、新入生諸君を激励するために、HCD2（ホーム・カミング・デー・パート2）と呼ばれる事業で参列されています。戦後、日本の守護神として我が国と地域の平和と安全に大きな役割を果たされた第6期生の大先輩たちに盛大な拍手をお願いいたします。」と紹介され、参列されている第6期生の方々は、会場全体からの拍手に応じて全員が立ち上がり、謝意を表しました。

学校長は、この後「新入生諸君にはとても想像がつかないでしょうが、今から60年後、同じようにホーム・カミング・デーに際して、この防大の地、小原台に戻ることになります。6期生、つまりつまり60年前の新入生が同席していたことを覚えておいて下さい。諸君たちは、今から60年後、126期の新入生を目撃することとなります。」とHCD2の継続に言及されました。

学校長は、続けて「私は、防衛大学校は間違いなく日本でまさにトップクラスの学校であると確信しています。その第一は、防大の教育水準の高さです。」と一般大学に比べて履修単位数が多いことと少人数の教育体制を挙げられ、「第二に、防大は大学であると同時に職業訓練学校であります。」と学術以外に体力と訓練面の練成を行い、更に団体生活を通じてチームワーク、団結心、絆意識などを養い、心身ともにバランスの取れた国際人を育てることに意を尽くしていること、「第三に防大のもつ圧倒的に重要な存在意義と、そこで培われる使命感（ミッション）であります。」と、防大は我が国に一つしか無い士官学校であり、他の大学がこの役割を担うことは出来ないこと、更に、防大は国と国民に奉仕する、つまり他人（ヒト）のために人生を捧げる強い使命感（ミッション）を涵養することに最大の目的をおいている」と述べられました。

最後に、「防大はそうしたことに満足することなく、絶えず創造的に革新を続け、「世界一の士官学校」これが現在の防大が目指す目標であり、新入生諸君たちは世界水準の中で生きてゆかなければなりません。新入生の諸君たちは、今日から防大を創造する一員として我々の仲間に加わったのです。」と、結ばれました。

山本防衛副大臣は、「先の防衛大学校卒業式において、安倍総理が述べられました。『平和』は決して他人から与えられるものではありません。我々の手で勝ち取るものであります。自らの手で自らを守る気概なき国を、誰も守ってくれるはずがない。安全保障政策の根幹となるのは、我が国自身の努力にほかなりません。

これは、ここにいる皆さん一人一人に求められる役割と重要性を意味するものであります。将来の幹部自衛官としてどのようにあるべきか。防衛大学校での4年間を通じ、一人一人、探求していただきたいと思えます。」と訓示されました。

本松統合幕僚副長は、祝辞で「今日からは防衛大学校職員が、そして先輩学生が温かく、時には厳しく諸君を導くことでしょう。これからの生活は諸君の人生

にとり、かけがえのない素晴らしい充実した4年間になることでしょう。ここ小原台に集う同期生とともに、青春を謳歌し、情熱を燃やして、これからの学生生活を送ってもらいたいと思います。」と述べられ、「同期生同士で切磋琢磨し、将来、自衛隊を率いる幹部自衛官となるため、資質と識能を身に付けてもらいたい」また、「将来の更なる統合運用のため、同期の絆を育んでもらいたい」と要望されました。（学校長式辞、防衛副大臣訓示、来賓祝辞は「防衛タイムズNO. 201」に掲載されています。）

第6期生の方々は、入校式後の観閲式までの時間を利用して楨記念館や在校当時と大きく変わった校内を散策され、陸上競技場で行われた観閲式を見学された後、第6期生会総会と懇親会を実施する横須賀市内のホテルへ移動されました。

終わりに、第6期生のHCD2の実施にあたり、第6期生会担当者の皆様のご労苦に対し、心からの慰労を申し上げますとともに、準備から本番まで親身になってご支援いただいた防衛大学校職員の皆様に心から感謝申し上げます。

（同窓会本部事務局事業部HCD2担当記）



山本防衛副大臣の訓示



本松統合幕僚副長の祝辞

◇第42期ホーム・ビジット・デー（HVD）

2018.12.8

爽やかな晴天に恵まれた11月10、11日の両日、防衛大学校は、平成30年度開校記念祭を開催しました。平成最後の開催となる今年度の開校記念祭は、防衛大学校創立66周年記念「未来へ繋ぐ～Road to the future～」をテーマに掲げて開催されました。そして、卒業20周年目にあたる本科第42期生は、ホーム・ビジット・デー（HVD）を母校・防衛大学校の開校記念祭に合わせて開催し、数多くの参加者が旧交を温めることができました。

我々、第42期生（平成6年4月入校）は、3期目となる本科学生への女性の受け入れや、学生の指導力強化を企図した学年別2人部屋制から学年混合4人部屋制への移行等、防大の歴史の中でも大きな変革と言える時期に4年間の学生生活を過ごしました。卒業後は、陸海空自衛隊の中核を担う幹部自衛官として歩みはじめ、この20年間、各種任務遂行の現場の指揮官として、また、防衛力整備等を担う幕僚として尽力して参りました。また、母国に戻った留学生は各国軍隊における主要幹部として、自衛隊を退職した同期生は民間企業や政府機関等の多様な分野において、それぞれ活躍して参りました。

さて、第42期生HVDは、11月11日に行われ、留学生3名を含む卒業生119名、御家族を含めると歴代最多となる274名が小原台に集い、旧交を温めることができました。卒業後、初めて来校した同期生も多く、新たに整備された本館、記念講堂、図書館、学生舎、学生食堂等に驚くと同時に、古き良き時代の面影を残す6～8号舎や学生会館の姿、小原台から眼下に広がる東京湾の景色を見て、かつての学生時代の思い出に浸りました。

当日はまず、第42期生HVDの開催準備の中核を担った4名の代表者（根本勉君（陸）、末本紀彦君（陸）、速水孝明君（海）、山口嘉大君（空））による國分良成学校長への表敬を実施し、HVD開催の機会を頂けたことについて謝意を伝えました。



陸海空代表者による國分学校長への表敬

その後、総合グラウンドで開催された記念式典・観閲式においては、観閲台のそばに設置されたHVD専用観覧席において、学校長式辞、祝賀飛行、学生隊観閲行進、空挺降下、儀仗隊のドリルなどを見学しました。



記念式典・観閲式 見学の様子

HVDのメイン・イベントである懇親会は、学生会館4階の大ホールにおいて12時50分から14時30分まで行われました。

懇親会は、宮丸和成君（陸）と内藤亮君（海）の司会進行のもと、冒頭において、卒業後に御逝去された同期生物故者6名への黙とう、期生会代議員山口嘉大君（空）による期生会長 武田和克君（陸）の挨拶代読、宇都隆史参議院議員（空）による乾杯で開始されました。



宮丸君・内藤君による司会進行



後川君を中心とした会場受付



山口君による期生会長挨拶代読



宇都議員による乾杯

参加者は、20年ぶりの再会に思い出話の花を咲かせつつ、同伴した子供たちの成長ぶりに驚くとともに、御夫人同士の交流も深めることができました。

HVDに参加するため母国等から駆けつけてくれたチャチャワン・ヘンキヤツテイケン君（タイ）、アッサウイン・ジャンタラティン君（タイ）、スレッシュ・サンオブ・ヴィジャ君（マレーシア）の3名の留学生から当時の思い出や近況について、ユーモアを交えて挨拶を頂きました。



御夫人同士の交流



将来有望な同期生の子供たち



タイ留学生チャチャワン君



タイ留学生アッサウイン君



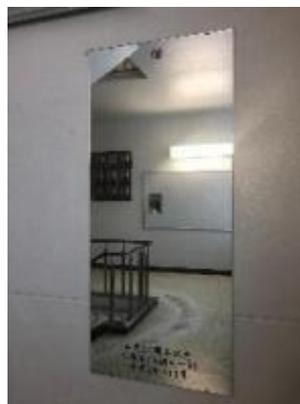
マレーシア留学生 スレッシュ君

HVD懇親会にお越しいただいた國分学校長からは、「世界一の士官学校を目指す」を合言葉に防大の発展に御尽力されていること、これほどまでに多くの同期生と家族一同が集まる42期生の結束の固さを称えるとともに、引き続き同期生の団結を大切に、20年後にまた改めて再会できるように、と激励の御言葉を賜りました。

また、杉本同窓会長からは、HVD開催準備を通じて更新した同期生名簿を継続的に更新し、同期生の連絡網を維持するとともに、同窓会活動への理解を促進しつつ、引き続き期生会活動の活性化を進めるように、との御言葉をいただきました。



63期 期生会長
武石学生へ寄贈品贈呈



設置された姿見鏡

64期 應援團リーダー一部團頭 石田学生ほか3名の団員による口上に引き続き、参加者全員が肩を組んで逍遙歌を斉唱しました。

そして、第1大隊首席指導教官 末本紀彦君（陸）が本イベントの最大の功労者である第13中隊指導教官坂本章君（空）の尽力を称えつつ一本締め。最後に、全員で記念写真を撮影し懇親会を終えました。



應援團リーダー一部による口上と同期生全員による逍遙歌斉唱



末本 1 大隊首席指導教官
による一本締め



開催準備に尽力した
坂本 1 3 中隊指導教官



参加者全員による記念撮影

懇親会終了後、陸上競技場のHVD専用観覧席へ移動し、棒倒し観戦を楽しみました。棒倒しにおいては、第2大隊がその精強さを見せつけ、昨年に引き続き優勝を果たしました。



さあ、どの大隊が優勝するか!?



第2大隊 優勝!

防衛大学校におけるイベント終了後、留学生を含む約50名の同期生は、思い出深い「割烹旅館 東京湾」へ移動し、例年実施している陸・海・空・民間の合同同期会を開催（幹事団：富川輝（空）、岡田豊（陸）、野中賢太（海）、那須誠一郎（空））しました。

な残を惜しむ一部の同期生は、横須賀中央の「鳥好」へ移動し、同期会延長戦を開催しました。こうして第42期生のHVDは盛会のもと幕を閉じ、参加者は、それぞれの持ち場へ帰っていきました。

（第42期同期生会HVD担当 山口 嘉大記）
（同窓会事務局事業部HVD担当校正）



舞台は思い出深き「東京湾」へ



夜の部総幹事
富川君の司会進行



岡田君（陸）の乾杯により合同同期会開始



留学生ネタを披露する田中君



自衛官の可能性について
熱く語る宮丸君



ニックネームについて語る橋口君



米国政治情勢を
真面目に語る小黒君



4 2 期期生会の発展を祈念して乾杯！お疲れ様でした！

◇平成29年度防衛大学校同窓会代議員会等（実施報告）

2019. 4. 9

平成31年3月9日(土)明治記念館において平成30年度防衛大学校代議員会・講演会・懇親会が開催され、平成30年度の同窓会事業を締めくくることができました。

平成29・30年度の同窓会の事業及び防衛大学校の現状について確認していただくとともに、平成31年度の事業計画・検討課題等について貴重なご意見をいただきました。

また、深山明敏第1期生会長から、「平成31年度をもって第1期生会の組織的活動を終了する」との報告と同窓会に対する今後の期待が述べられ、代議員からはこれまでの1期生に対する感謝を込めて大きな拍手が送られました。

平成31年度の代議員会は、令和2年3月7日(土)を予定しておりますので、各期生会・支部代議員のより多くの参加をお願いします。また、同日に実施される講演会・懇親会の一般会員への案内及び申し込み受け付けは、この防衛大学校ホームページを通じて行うこととしていますので、会員の皆様におかれましては本ホームページを活用いただくようお願いいたします。案内は6月頃、申し込み受け付けは年明けの1月を予定しています。

1 代議員会(1330～1545)

代議員205名(出席105名、委任100名)の出席を得て、代議員総数264名の過半数以上の代議員会成立要件が満たされました。

代議員会は、以下の次第で実施されました。

- ・ 杉本正彦同窓会長挨拶（18期海）
- ・ 議長選出
- ・ 議案審議 平成29年度事業報告・決算報告・会計監査報告
- ・ 報告事項 平成30年度事業実施状況
- ・ 議案審議 平成31年度事業計画(案)・事業予算(案)
平成31年度同窓会役員(案)
- ・ 報告事項 期生会の解散対応の検討結果
名簿管理要領等の見直しの検討結果
- ・ 防衛大学校の現状と取り組み
- ・ お知らせ 保安大学校記念碑建立
物故者名簿閲覧要領
「講演会・懇親会」案内試行
平成31年度代議員会等の開催予定



杉本同窓会長あいさつ



第1期生会長の報告

2 講演会（1600～1725）

ジャーナリスト、国家基本問題研究所理事長の櫻井よしこ氏を講師として、講演会を実施しました。同窓生から多くの質問がなされるなど、予定時間を超えた熱気あふれる講演となりました。

細部については次のとおりです。

- ・ 講演会講師 櫻井よしこ
- ・ 演題「激動する内外の情勢を踏まえ、我が国の進むべき道」
- ・ 参加者306名



講演される櫻井よしこ氏



会員からの活発な質問

3 懇親会（1740～1900）

明治記念館富士の間において、櫻井よしこ氏の講演に引き続き、懇親会が開催されました。主催者である18期生の杉本正彦同窓会会長による開会挨拶、来賓紹介に続き、来賓代表として國分良成防衛大学校長及び42期生の宇都隆志参議院議員のお二人からご祝辞をいただきました。

國分学校長のご祝辞においては、防衛大学校主要幹部紹介の後、第95回箱根競走において、関東学生連合チームの一員として素晴らしい走りを見せた63期生の古林潤也学生が、41期生の和泉憲昌陸上競技部監督とともに登壇するサプライズがあり、その大活躍に対し会場から割れんばかりの拍手が送られました。

その後同窓会副会長である21期生の河野克俊統合幕僚長による乾杯で祝宴が始まり、久々に会う同期、先輩、後輩と歓談し、親睦を深める姿が会場各所で見られました。

最後は学生歌を全員で斉唱し、今年度の開校祭でHVD（ホームヴィジットデー）を実施した42期生の小林貴1等陸佐による万歳三唱がなされ、盛会のうちに終了しました。

（本部事務局 総務部 27期陸 星指 隆記）



國分学校長と古林学生・和泉監督



河野統合幕僚長の乾杯



歓談する会員



万歳三唱

◇第20期ホーム・カミングデー（HCD）

2019. 4. 10

第20期生ホーム・カミング・デー（以下、HCDという。）行事が、平成31年3月16日（土）及び17日（日）に行われました。

HCDは、第6代松本三郎防衛大学校長の発案で、第1期生が平成12年3月の卒業式典に招待されたことから始まり、以降、毎年卒業後43年目にあたる期が招待されています。今回は、國分良成学校長から平成30年度卒業式典（本科第63期学生等）への招待により実施されました。

第20期生HCD行事は、卒業式前日の3月16日（土）17時からの前夜懇親会で幕を開けました。

当日、会場となった横須賀平安閣には、開会の1時間も前から20期生及びご家族が続々と参集し、受付では「おう！久しぶりだな！」という声が飛び交い、早くも熱気に包まれていました。

前夜懇親会は、20期生144名、ご家族63名が集う中、國分学校長、辻副校長、納富幹事、杉本防大同窓会長等のご来賓の参加を得て、司会の高田氏の開会の辞で始まりました。

最初に、同期生の物故者27名の在りし日（卒業アルバム）の姿がスライドに投影され、「国の鎮め」が流れる中、厳粛に黙祷が行われました。続いてHCD実行委員長の片岡氏より挨拶があり、久々の再会を祝するとともに、本HCDの支援・準備にあたっていただいた担当者・スタッフへの謝辞に引き続き、学生時代の懐かしいお話が披露されました。

次に、来賓を代表して國分学校長からは、「同期のみなさん、お帰りなさい！」と歓迎の言葉に引き続き、「皆さんと同じ年代の20期相当ですが、7年間も防衛大にいますので、皆さんよりも防大生です。卒業したら仲間に入れてください。」など、ユーモアたっぷりの挨拶に始まり、「防大生は素晴らしい。日本の宝である。明日は、卒業生の逞しい姿をしっかりと見て欲しい。」との力強いお言葉がありました。



挨拶する片岡実行委員長



祝辞を述べる國分学校長



乾杯の挨拶をする
佐藤期生会長

祝宴開始の乾杯は、20期生会長の佐藤氏が大いに盛り上がろうと発声し、会場は賑やかな雰囲気へと移っていきました。

会場は1～5大隊の大隊別で配席されていましたが、当初の配席とは関係なくいろいろなところに大小多数の人の輪ができ、懇親会は盛況のうちに進みました。



歓談の様子

懇親会が盛り上がる中、「プロジェクトX」と題した20期生の防大入校から始まる厳しい学生生活や訓練が撮影された写真や動画の上映が始まり、あどけなさが残る少年から逞しく成長した卒業の日まで進んだ時には会場は大きな歓声に包まれました。スライドショーは東日本大震災やソマリア沖・アデン湾における自衛隊の活動、スクランブルの紹介へと続き、その中で当時の東北方面総監君塚陸将をはじめとした20期生がとても重要な役割を果たされたことも紹介され、強く心を打たれるものでした。スライドショーは学生時代の各中隊の写真が映し出される中、逍遥歌斉唱・学生歌斉唱へと移り、学校長、来賓も含め全員が映像に引き寄せられながら大きな声で歌われました。そして、最後は関口氏の発声による万歳三唱で前夜懇親会はお開きとなりました。



懇談の様子



逍遥歌斉唱



関口氏の発声による万歳三唱

卒業式当日の17日（日）は、少し肌寒さを感じる朝を迎えましたが、雲ひとつない気持ちの良い晴天となり、8時の開門前から20期生とご家族の皆様が続々と到着してきました。そして、防衛学館に陸・海・空の要員毎に準備された控え室に、20期生131名と71名のご家族が集合し、役員から行事の全般予定の説明を受けました。



正門前の様子



防衛学館に向かう20期生



受付の様子



控え室での全般予定の説明

8時50分には全員が顕彰碑に集合し、顕彰碑献花式が行われました。20期生は、故出口和俊氏（昭和56年9月5日殉職 1等陸尉）、故越智修三氏（昭和58年4月19日殉職 1等空尉）の2名が殉職されており、同期生の殉職者を含めた同窓生のご冥福を祈り、式は厳粛のうちに終了しました。

顕彰碑献花式終了後は時計台横で、國分学校長、香月副校長、納富幹事のご参加をいただき、全員で記念写真を撮影し、卒業式会場の記念講堂に向かいました。



顕彰碑献花式



時計台横での記念撮影

記念講堂内には、今年も学校側の配慮をいただき、20期生HCDのために140席を準備していただきました。

また、式場に入れなかった方は、防衛学館の控え室に設置されたスクリーンでの卒業式の見学となりました。記念講堂に入場できない方へのサービスとして、卒業式の開始に先立ち、9時25分から30分間、記録映画「防衛大学校—我々が日々—」が上映されました。この記録映画は、20期生が卒業した昭和51年に防衛庁により企画され、石原プロダクションによって制作されたものです。20期生が随所に登場する鮮明な映像に、控え室は大いに盛り上がり、歓声に包まれました。



卒業式の開始を待つ20期生



控え室での卒業式見学

卒業式は予定どおり10時の安倍晋三内閣総理大臣の臨場により始まり、学校長から留学生を含め503名の本科学生、66名の理工学・総合安全保障研究科卒業生一人ひとりに卒業証書が授与されました。

学校長は式辞で、「本日はHCDとして昭和51年に防大を卒業された第20期生が参列されています。防大20期相当の私としては、本日は感慨深いものがあります。私たちの青春は冷戦の真只中であり、厳しい安全保障環境や自衛隊に対する社会の反応も厳しい中にも、皆さんは全国で日本の独立と平和を守り抜き、今日の平和と繁栄の礎を築かれました。最近、自衛隊が高い信頼度を得ているということは、戦後の民主主義体制の中で、防大の教育が正しかったことを証明しています。この信頼度を確かなものにしたのは東日本大震災でしたが、この際に自衛隊を現地で統括した君塚栄治東北方面総監はまさに防大20期生であり、天国から今日の良き日を見守っておられることでしょう。」と述べられました。

そして、卒業生に対し、「防大生活の中で培った知識と品性を現実の世界で生かす瞬間が君たちを待っています。」と激励され、今後の奮闘と活躍を祈念されました。



卒業証書授与



式辞を述べる國分学校長



学校長に紹介され
起立する20期生

自衛隊最高指揮官である安倍晋三内閣総理大臣も訓示の中でHCDについても言及され、「本日は、昭和51年に卒業されたOBの皆さんもお集まりです。皆さんがこの小原台で学んでいた頃、裁判所で自衛隊を憲法違反とする判決が出たことを覚えておられる方も多いかもかもしれません。当時、自衛隊に対する視線は厳しいものがありました。

しかし、皆さんは、歯を食いしばり、昭和から平成へと時代が変わる中、厳しさを増す安全保障環境に立ち向かい、数々の困難な現場にあつて、国民の命と平和な暮らしを守り抜いてくれました。

大きな仕事を遂げ、ここ小原台に戻って来られた皆さんへ、心からの感謝と敬意を込めて、会場の皆さんとともに、大きな拍手を送りたいと思います。」と述べられ、安倍内閣総理大臣の拍手に合わせて会場の全員が20期生を祝福し、一同最大の誇りと感謝で感極まるとともに、HCD最大の盛り上がりとなりました。

そして、卒業生に対し、「今や、自衛隊は、国民の9割から信頼度を勝ち得ています。先人たちがたゆまぬ努力によって築き上げてきたこの成果を受け継ぐ卒業生諸君は、静かな誇りを持ちながら、更なる高みを目指して、それぞれの自衛官人生を歩んでほしいと思います。」と熱く訓示されました。



20期生を紹介する安倍総理大臣



敬礼して応える20期生

防衛学館の4つの教場に設置されたスクリーンで卒業式を見学した20期生及びご家族の皆様も、國分学校長及び安倍総理大臣のHCDへの言及、拍手の際には、感激の聲が沸き起こりました。

岩屋毅防衛大臣は訓示において、まず卒業生に対して「防大で養ったリーダーとしての土台を基礎とし、堂々たる幹部自衛官として大きく成長してください。」と激励され、「昨年末、防衛計画の大綱と中期防衛力整備計画を決定しました。現在の安全保障環境から、新たな領域における優位性の確保が死活的に重要となってきたことから、統合機動防衛力をさらに進化させ、多次元統合防衛力を構築することになります。これは新たな挑戦であり、私とともに安倍内閣総理大臣の下、国民の期待と信頼に応え得る防衛力を創り上げるため、全力を尽くして欲し

いと思います。」と激励されました。

また、「女子学生1期の東良子1海佐は、女性初の護衛隊司令として先月海賊対処水上部隊指揮官の任務を完遂しました。1期に続く女性自衛官の活躍は目覚ましく、連隊長、戦闘機パイロットも誕生しています。変革の先駆けたらんとする気概をもって職務の精励を願います。」と要望され、留学生に対しては、「貴国と日本との友好協力関係の架け橋になってもらいたいと思います。」と希望されました。そして、最後に、「常に己を磨き、人格を錬磨し、立派なリーダーになっていただきたい。」と激励されました。

来賓祝辞では、川島裕前侍従長・元外務事務次官が、「以前は、武力は民主主義を脅かすものであり、防衛力と民主主義は反比例すると論ずる者もいた時代もありました。これは、先の戦争への悲劇的な道を歩んだという歴史的な体験に基づく反対論です。しかし、時間の経過によってこのような反対論は聞かれなくなりました。最近では、民主主義を脅かすものではないという考え方は十分に定着しています。このような時代となったのも、本日の卒業生の先輩の努力の積み重ねがあったからです。もし、このことに少しなりとも疑念が残っていたならば、犬養毅のひ孫である自分は、本日ここには来なかったと思います。」と述べられるとともに、天皇・皇后両陛下に随行して東日本大震災の被災地を訪れた際、両陛下は君塚総監による自衛隊の活動報告をととても熱心にお聞きになっていた様子などが紹介され、「聞こえてくるのは人々を救うために駆け付ける自衛隊の足音です。」と自衛隊の活動を称賛され、崇高な職務に就こうとする卒業生の今後の活躍を期待されました。



訓示を述べる岩屋防衛大臣



祝辞を述べる川島前侍従長
(元外務事務次官)

卒業式は卒業生代表による答辞につづき、最後に卒業生全員による思いのこもった学生歌斉唱で閉式となりました。そして12時、安倍内閣総理大臣が見守る中、卒業生代表の「63期解散！」の指示により、恒例の「帽子投げ」が行われました。



学生歌斉唱



帽子投げ

その後、記念講堂に陸・海・空それぞれの真新しい制服に着替えた卒業生が緊張した面持ちで待機する中、安倍内閣総理大臣が臨場し、12時30分に一般幹部候補生の任命宣誓式が始まりました。まず、山崎幸二陸上幕僚長、村川豊海上幕僚長、丸茂吉成航空幕僚長が陸上・海上・航空の各要員を陸・海・空曹長及び一般幹部候補生にそれぞれ任命しました。そして、幹部候補生全員で宣誓を行い、陸・海・空の各代表が安倍内閣総理大臣に宣誓書を手渡するとともに、握手を交わしました。この時、防衛学館のスクリーンに流れる映像を見ていた20期生には、自分たちが宣誓した当時には予想も出来なかった光景に、どよめきの声がありました。



宣誓を受ける安倍総理大臣



宣誓書を受領し候補生と握手

任命宣誓式終了後、陸上競技場において第3学年以下の在校生による観閲式が行われました。

観閲式には、陸・海・空自衛隊の防衛大を卒業した先輩が操縦する6機種13機の航空機による観閲飛行も行われ、観閲式に花を添えました。

20期生は陸上競技場の一角に設けられたHCD専用の席で観閲式、観閲飛行、観閲行進を見学し、整齐とした学生たちの姿に当時の自分を重ねるとともに、惜しみない拍手を送っていました。



観閲式



学生隊に拍手を送る20期生



岩屋防衛大臣による巡閲

その後、希望者は事前に示されていた4つのグループに分かれ、第1大隊から第4大隊の学生舎を見学しました。各学生舎では、指導官及び各学年の学生が小グループごとに研修を担当し、20期生やご家族からの質問にも親切に答えてくれていました。

2日間の参加者は、20期生162名、ご家族79名、総勢241名であり、学生舎見学をもって20期生HCDのすべての行事は終了しました。



観閲行進する学生隊



学生舎見学

最後に、20期生HCDの実施に向け、2年前から準備を進められた実行委員長以下実行委員の皆様のご活動に対して心からの慰労と感謝を申し上げますとともに、20期生HCDの準備から実施に至るまで懇切丁寧にご支援いただきました防衛学教育学群長をはじめとする防衛大学校職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

(同窓会本部事務局HCD担当28期陸 飯田 重喜記)

◇保安大学校記念碑建立行事（2019. 3. 30）

防衛大学校同窓会は、平成31年3月30日（土）、陸上自衛隊久里浜駐屯地及び防衛大学校において、保安大学校記念碑建立行事を行いました。

防衛大学校の前身である保安大学校は、昭和28年4月1日に久里浜駐屯地の仮校舎で開校され、昭和29年7月1日に防衛大学校と改称し、昭和30年4月1日に小原台校舎に移転しました。この間、第1期生及び第2期生が創設期の久里浜仮校舎で学びました。

保安大学校記念碑は、保安大学校の歴史的・の証、地理的証として久里浜駐屯地に建立するものであり、平成28年度に第1期生会より同窓会に要望が出され、同窓会の平成30年度事業として久里浜駐屯地内に建立されたものです。

建立行事は、杉本正彦同窓会長を主催者として、國分良成防衛大学校長、保安学校当時の教官であった土肥祥荘元防衛大学校教授、藤本良三元防衛大学校教授、折木良一前防衛大学校同窓会長他をお迎えして、第1期生・第2期生約80名、久里浜駐屯地同窓会員約30名他の参加を得て行われました。



【保安大学校記念碑と来賓】

國分防衛大学校長は除幕式の祝辞において、安倍内閣総理大臣から「防衛大学の当初、非常にご苦労されたことは容易に想像がつきます。しかし、その後新しい治平を築き、そして今日のような自衛隊に造り上げてくれました。皆様にくれぐれも感謝申し上げます。」との第1期生・第2期生に対するお言葉を紹介され、「防衛大学は戦後の英知の結晶であり、その英知の結晶の原点がここにあるということを忘れずにこれから現役の学生にも伝えていく。」と述べられました。



【國分防衛大学校長祝辞】



【除幕式会場】

深山明敏第1期生会長は「防大スタートの原点に関わることができたことを誠にラッキーな人生であった。」との思いと、母校の後輩たちがいついかなる事態に遭遇しても国民の負託に応えるように立派な成果を収めることへの期待を述べられました。



【深山第1期生会長祝辞】



【来賓・第1期生】

除幕式の後、防衛大学に会場を移し、防衛大学学生とともに記念会食を行いました。

吉崎格第2期生会長の乾杯の後、第1期生・第2期生と第64期生・第65期生・第66期生の間で、66年の時を超えた今昔の話に花が咲きました。



【吉崎第2期生会長乾杯】



【現役学生との懇談】

記念会食の後、第1期生・第2期生は、防衛大学校の記念館研修、学生舎研修、校内のバスツアーを行い、今の防衛大学校の姿を確認し、創設期の思いを胸に小原台を後にしました。



【防衛大学校研修～榎校長像の前で】

最後になりますが、本事業は第1期生会の浄財を同窓会の特別予算に組み入れ行われた事業であり、残金は同窓会への寄付として同窓会で活用させていただくことを同窓生の皆様に報告させていただきます。

本行事をご支援いただいた久里浜駐屯地、防衛大学校の関係者の皆様に深く感謝いたします。

(27期陸 星指 隆)

■連絡事項

◇平成29年度防衛大学校同窓会決算書（平成30年3月31日現在）

【単位：円】

区分	事業等		29年度 予算	29年度 決算額	差異	備考		
一般 会計	収入	同窓会費		20,280,000	20,554,520	274,520	61期 382名*0.87=332名⇒333名、個別10名	
		預貯金利息・国債利金		1,496,000	1,500,778	4,778		
		雑収入		1,481,000	1,390,594	-90,406	懇親会会費 1,197,000円	
		収入合計(①)		23,257,000	23,445,892	188,892		
	支出	母校の充 実・発展 への寄与	1	新入生に対する講話	5,000	0	-5,000	学校の事業計画変更により中止
			2	第4学年に対する講話	5,000	0	-5,000	学校の事業計画変更により中止
			3	各種競技会支援	420,000	52,280	-367,720	前年度纏め買いのため
			4	期生会発会等支援	600,000	609,390	9,390	
			5	学生の部隊実習支援	1,010,000	991,575	-18,425	
			6	顕彰碑顕花式支援	310,000	170,620	-139,380	銘板作成なし
			7	開校記念祭支援	2,070,000	2,028,700	-41,300	支援金200万円
8			校友会対外活動支援	1,000,000	808,000	-192,000	3委員会、12部、3同好会等	
9			学術向上策支援	170,000	168,440	-1,560	優秀研究レポート18作品(陸、海、空別)	
10			同窓会著作等の寄贈	50,000	0	-50,000		
	11	留学生学業基盤整備支援	440,000	380,000	-60,000			
	小計(②)		6,080,000	5,209,005	-870,995			

(続き)

一 般 会 計	支 出	会 員 相 互 の 親 睦 交 流	12	同窓会ホームページの運営	170,000	90,689	-79,311	
			13	会員の慶弔業務	700,000	327,096	-372,904	
			14	各種競技大会による交流	250,000	230,624	-19,376	テニス・ゴルフ・囲碁各5万円、学生支援実績なし
			15	地域支部等への助成	520,000	240,324	-279,676	8コ支部3万円/支部
			16	卒業留学生との交流	10,000	26,872	16,872	
			17	HVD支援	320,000	307,329	-12,671	41期
			18	HCD2支援	70,000	63,264	-6,736	6期
			19	HCD支援	380,000	356,148	-23,852	19期
			20	講演会・懇親会の実施	4,300,000	4,421,624	121,624	講演会・懇親会案内状7227枚、懇親会費等
			小計(③)		6,720,000	6,063,970	-656,030	
	社 会 活 動 へ の 寄 与	21	安全保障講座支援	100,000	100,000	0		
		小計(④)		100,000	100,000	0		
	会 務 運 営 基 盤 の 充 実	22	代議員会の実施	880,000	982,356	102,356	返信用葉書563枚	
		23	同窓会名簿の維持	50,000	112,553	62,553		
		24	期生会名簿の作成支援	40,000	0	-40,000		
		25	地域支部等の活性化	200,000	0	-200,000		
		26	会費納入の促進	380,000	275,762	-104,238		
		小計(⑤)		1,550,000	1,370,671	-179,329		

(続き)

一般 会 計	支 出	検 査 事 項	27	防大「高みプ ロジェクト」 への貢献の 在り方検討	25,000	0	-25,000	
			28	個人情報保 護の在り方 検討	0	0	0	
			29	「保安大学 校跡地の記 念碑建立」に ついて	0	37,662	37,662	
			小 計 (⑥)		25,000	37,662	12,662	
	維 持 管 理	事務費	600,000	739,474	139,474			
		通信費	350,000	296,044	-53,956			
		交通費	480,000	553,670	73,670			
		会議費	160,000	216,835	56,835			
		事務員雇用費	1,330,000	1,440,000	110,000			
		事務所賃貸費	5,370,000	5,677,971	307,971			
		小原台事務局運 営費	150,000	200,062	50,062			
		小 計 (⑦)		8,440,000	9,124,056	684,056		
	支出計 (⑧ = ② + ③ + ④ + ⑤ + ⑥ + ⑦)		22,915,000	21,905,364	-1,009,636			
	予備費 (⑨)		342,000	0	-342,000			
	支出計 (⑩ = ⑧ + ⑨)		23,257,000	21,905,364	-1,351,636			
	収入総計 (①)		23,257,000	23,445,892	188,892			
	支出総計 (⑩)		23,257,000	21,905,364	-1,351,636			
次年度への繰り入れ額 (⑪ = ① - ⑩)		0	1,540,528	1,540,528				

◇平成30年度期生会長・代議員名簿（平成31年4月1日現在）

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸:氏名	海:氏名	空:氏名	氏名	要員
1	深山 明敏	陸	陸井 益三	藤井 勝利	田中 憲明	大東 信祐	陸
2	吉崎 格	陸	吉崎 格	石原 公夫	大庭 肇	高岩 利彦	陸
3	西元 徹也	陸	及川 雅道	手塚 正水	出口 哲夫	野本 眞二	陸
4	田中 厚彦	空	金田 孝之	藤岡 瑩	今西 邦大	藤田 健作	陸
5	福地 建夫	海	三浦 天士	富 一郎	齋藤 賢爾	浅野 勇蔵	陸
6	阿部 英輔	陸	池田 勝	福塚 啓二	星野 元宏	福塚 啓二	海
7	佐々木 英嗣	陸	吉田 公道	高木 基博	村木 裕世	藤尾 秀治	陸
8	志村 隆士	陸	建部 佳平	古澤 忠彦	堀 晋介	光田 隆至	陸
9	磯島 恒夫	陸	小島 捷利	長崎 嘉徳	日高 久萬男	吉橋 誠	陸
10	瀬戸 正胤	空	嶋野 隆夫	坂東 勝昭	川田 哲雄	嶋野 隆夫	陸
11	石川 亨	海	洞澤 佳廣	竹村 訓	赤羽 益三	阿保 文敏	陸
12	金田 秀昭	海	水口 勇	藤田 泰夫	橋本 康夫	藤田 泰夫	海
13	牧本 信親	海	篠田 芳明	新宮領 篁	花岡 芳孝	寺口 聡	海
14	岡 利彦	海	寄田 修	斎藤 隆	稲葉 憲一	有井 一弘	空
15	林 直人	陸	瓦谷 育夫	平山 為祥	江口 啓三	佐藤 誠喜	陸
16	折木 良一	陸	石川 由喜夫	橘 恒紀	堀 好成	石川 由喜夫	陸
17	赤星 慶治	海	廣瀬 誠	赤星 慶治	永田 久雄	石村 澄雄	海
18	火箱 芳文	陸	植木 美知男	谷村 文雄	長尾 齊	植木 美知男	陸
19	岩崎 茂	空	師岡 英行	武田 壽一	下平 幸二	風間 敏榮	陸
20	佐藤 貞夫	陸	西村 智聡	加藤 耕司	渡邊 至之	今井 恵治	陸
21	小野田 治	空	渡邊 隆	山本 高英	秦 啓次郎	山崎 剛美	空
22	宮下 寿広	陸	田原 昭彦	松下 泰士	福井 正明	石野 貢三	空
23	岩本 豊一	陸	藤井 貞文	福本 出	尾形 誠	岩崎 親裕	陸
24	杉山 良行	空	武内 誠一	原田 哲郎	半澤 隆彦	武内 誠一	陸
25	高鹿 治雄	海	岡部 俊哉	池田 徳宏	吉田 浩介	徳丸 伸一	海
26	尾上 定正	空	深津 孔	堂下 哲郎	尾上 定正	山口 浩樹	空
27	小林 茂	陸	小林 茂	副島 尚志	丸茂 吉成	小林 茂	陸
28	田浦 正人	陸	田浦 正人	真鍋 浩司	渡邊 博史	田浦 正人	陸
29	馬場 邦夫	陸	中村 浩之	中尾 剛久	長島 純	時藤 和夫	空
30	堀切 光彦	陸	山崎 繁	時久 寛司	竹平 哲也	山崎 繁	陸
31	前田 忠男	陸	山口 和則	今村 靖弘	後藤 雅人	山口 和則	陸
32	阿部 睦晴	空	池田 頼明	梶元 大介	柴田 利明	植村 茂己	空
33	中塚 千陽	空	山根 寿一	齋藤 聡	沖野 克紀	沖野 克紀	空
34	佐藤 信知	空	大谷 勝司	大西 哲	小笠原 卓人	小笠原 卓人	空

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸:氏名	海:氏名	空:氏名	氏名	要員
35	稲月 秀正	空	戒田 重雄	伍賀 祥裕	吉村 一彦	熊谷 三郎	空
36	寺崎 隆行	空	松永 浩二	石巻 義康	寺崎 隆行	松永 浩二	陸
37	宇佐美 和好	空	小川 隆宏	浦口 薫	宇佐美 和好	宇佐美 和好	空
38	石井 浩之	空	浅賀 政宏	濱崎 真吾	白井 亮次	山崎 武志	空
39	湯下 兼太郎	陸	湯下 兼太郎	平田 利幸	中川 一	湯下 兼太郎	陸
40	清水 徹	海	梨木 信吾	川野 邦彦	石引 大吾	兵庫 剛	陸
41	堤田 和幸	海	小林 貴	堤田 和幸	中谷 大輔	堤田 和幸	海
42	根本 勉	陸	根本 勉	佐瀬 智之	那須 誠一郎	横尾 和久	陸
43	鎌田 淳	空	澤 繁実	戸永 竜太	志津 雅啓	志津 雅啓	空
44	高橋 秀典	海	鈴木 攻佑	阿部 直樹	原田 理	阿部 直樹	海
45	青山 佳史	陸	庄司 秀明	岡澤 智和	坂田 靖弘	庄司 秀明	陸
46	田村 弘範	海	石岡 直樹	近藤 太郎	寺林 洋平	向 康司	海
47	吉水 憲太郎	陸	清田 裕幸	笠原 健治	中里 悠花	清田 裕幸	陸
48	和田 嵩一	海	桐谷 高弘	柏木 祐一郎	齋藤 真吾	柏木 祐一郎	海
49	山上 剛史	空	納谷 知希	小沼 洋祐	山上 剛史	山上 剛史	空
50	吉井 拓也	陸	益田 一字	八木 佑己	阿部 竹浩	益田 一字	陸
51	鬼塚 勇	陸	鬼塚 勇	林 大佑	森嶋 倫	鬼塚 勇	陸
52	成田 優	陸	成田 優	岡田 航	荒木 敬	成田 優	陸
53	濱田 卓	空	江嶋 宏次	松崎 圭祐	来栖 克則	濱田 卓	空
54	金澤 慧人	空	角丸 公康	垣内 隼斗	内藤 昌孝	金澤 慧人	空
55	若月 豪	陸	若月 豪	中村 知哉	加治 政樹	若月 豪	陸
56	松尾 聡一郎	陸	松尾 聡一郎	田中 結貴	舟津 貴正	松尾 聡一郎	陸
57	我妻 国明	陸	久保 翔平	裕村 駿明	大藪 秀斗	我妻 国明	陸
58	河合 真	海	秋島 一弥	浦山 修太郎	河野 健	河合 真	海
59	屋代 昌也	陸	渡邊 一生	馬渡 淳司	宮川 啓一	屋代 昌也	陸
60	浜野 広大	陸	田村 洋人	畠山 尚己	庄司 和正	今尾 友哉	陸
61	久米井 勇馬	空	池上 好古	神作 友陽	工藤 将人	伊藤 龍二	海
62	上中 龍基	空	神木 康誠	唐川 航輝	江打 諒馬	熊木 礼於奈	陸

◇平成31年度同窓会本部役員名簿（平成31年4月1日現在）

職名	氏名	期	要員	
会長	岩崎 茂	19	空	
副会長	岩田 清文	23	陸	
	畑中 裕生	22	海	
	中島 邦祐	23	空	
	[統合幕僚長]	山崎 幸二	27	陸
理事	【事務局長】	永井 昌弘	25	陸
		鍛治 雅和	24	海
		古賀 久夫	24	空
	[防大教授]	中村 康弘	26	陸
	[統幕総務部長]	尾崎 義典	32	空
	[陸幕監理部長]	柿野 正和	34	陸
	[海幕総務部長]	伍賀 祥裕	35	海
	[空幕総務部長]	荒木 哲哉	31	空
会計監事	藤井 貞文	23	陸	
	本庄 俊弘	24	陸	
	高橋 均	24	海	
	木村 孝	24	空	

◇地域支部等役員名簿（平成31年4月20日現在）

所属支部	役 職	氏 名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤 幸治	14	陸
	事務局長	篠原 賢治	34	陸
東北地域支部	支部長	赤坂 徹	17	陸
	事務局長	浅川 紀明	25	陸
栃木地区支部	支部長	正岡 富士夫	15	空
	事務局長	正岡 富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸
	事務局長	小島 健二	14	空
北陸拡大地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸
	事務局長	西川 清	15	陸
東海拡大地区支部	支部長	赤谷 信之	6	陸
	事務局長	横山 昌宏	15	陸
関西地域支部	支部長	大久保 博一	12	陸
	事務局長	大島 龍一朗	31	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡 元	10	陸
	事務局長	山本 洋	21	陸
島根地区支部	支部長	桑原 寿之	5	陸
	事務局長	持田 佳郎	13	陸
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空
	事務局長	永岑 富彦	10	陸
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海
	事務局長	土肥 弘実	25	海
山口地区支部	支部長	前田 房彦	13	空
	事務局長	山下 重夫	16	陸
四国拡大地区支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
徳島地区支部	支部長	福田 忠典	9	陸
	事務局長	清水 祥人	12	陸
香川地区支部	支部長	宇草 茂	18	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
愛媛地区支部	支部長	瀬川 紘一郎	10	海
	事務局長	森川 建司	22	陸
高知地区支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	川田 公一	16	空

(続き)

九州地域支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
福岡地区支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
佐賀地区支部	支部長	福井 秀平	23	海
	事務局長	福岡 龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	高橋 理一	16	海
	事務局長	大平 慎一	20	海
熊本地区支部	支部長	山下 高憲	17	陸
	事務局長	長尾 民穂	19	陸
大分地区支部	支部長	清末 純博	16	海
	事務局長	佐藤 文明	16	空
宮崎地区支部	支部長	大岐 継寛	15	陸
	事務局長	金丸 直史	19	空
鹿児島地区支部	支部長	石崎 耕太郎	16	陸
	事務局長	兒玉 健二郎	22	陸
沖縄地域支部	支部長	渡名喜 邦夫	21	海
	事務局長	金子 賢太郎	55	空
小原台クラブ	会長(支部長)	長谷川 礼司	17	空
	事務局長	及川 正稔	28	陸
桜華会	会長(支部長)	塚口 千枝(平松)	40	陸
	事務局長	嶋津 悠加(黒田)	45	空

◇平成30年度事務局員名簿（平成31年4月1日現在）

総務	部長		増田 潤一	26	陸
	補佐		星指 隆	27	陸
			小坂 明彦	27	海
	担当	総務	河本 宏章	28	陸
		新規事業	畠野 俊一	28	海
			坂尾 陽子	常勤	
人事	部長		篠田 充哉	26	空
	補佐		黒木 忠広	27	海
			穂積 文孝	27	空
	担当		佐々木 博茂	28	陸
			福應 光二	28	空
経理	部長		池畠 暢也	26	空
	補佐		藤永 映章	27	空
	担当		間瀬 元康	28	陸
事業	部長		荒関 和人	26	陸
	補佐	HCD/HVD	渡部 誠司	27	陸
		HCD2	清水 隆	27	海
		囲碁/留学生	安藤 哲夫	27	海
		テニス/助成	大居 一之	27	陸
		ゴルフ/講演	堀 博幸	27	海
	担当	HCD/HVD	飯田 重喜	28	陸
		HCD2	平野 剛	28	陸
		囲碁/留学生	上野 登	28	海
		テニス/助成	鴨 明彦	28	陸
		ゴルフ/講演	遠目塚 進	28	空
広報	部長		住谷 正仁	26	陸
	補佐	人材バンク(正)	長谷川 光成	27	陸
		人材バンク(副)	菅野 茂	27	陸
		機関紙	橋口 裕則	27	空
		HP	花田 順一朗	27	陸
	担当	人材バンク	多出村 秀勝	28	陸
		機関紙	相原 武士	28	空
		HP	白井 一弘	28	陸
技術指導		村田 和美	17	陸	
記念碑PJ総括			山本 克也	26	海

◇平成30年度小原台事務局員名簿（平成31年4月1日現在）

小原台事務局	事務局長	坂本	浩一	34	空
	局長代理	中澤	信一	28	海
		山口	直人	32	空
		関口	高史	32	陸
		森迫	隆文	31	陸
	局長補佐	相原	涉	36	陸
		内田	貴司	28	空
		宮島	麻衣	53W	陸
		事務局長業務管理	中村	尚人	49
	事務局員	中澤	信一	28	海
		山口	直人	32	空
		関口	高史	32	陸
		岸浦	信勝	37	空
		村上	強一	31	空
甘中		晴彦	33	海	
染谷		真次郎	43	陸	
末本		紀彦	42	陸	
瀧川	雄一	40	海		

■編集後記

平成30年度機関誌「小原台だより」は、ホームページにご寄稿頂きました方々、取材に応じて頂きました方々、各行事及び事業においてご協力を頂きました方々のお蔭をもちまして無事発行することが出来ました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

第23号から電子版としての発行を開始致しましたが、今回の第27号で電子版第4号を発刊する運びとなりました。また、編纂においては、これまで同様にホームページのアーカイブとしての記録保存の意義を重視して同窓会の年度のまとめとして役立つように努めております。

引き続き電子版「小原台だより」のご愛顧をよろしくお願い申し上げます。

(防衛大学校同窓会本部事務局機関紙担当記)